
サイクロプス

NEO,s

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サイクロプス

【ISBN】

N4068D

【作者名】

NEO-s

【あらすじ】

サイクロプス、それは自衛軍が極秘裏に開発した遠隔操作ロボットの事である。ある日、自衛軍は徴兵を開始した、対象者は大学・短大・専門に在学中の学生全員であり、正道真一もその中の一人であった。やがてサイクロプスは彼らを巻き込み動き出す

～プロローグ（修正1）～

窓際の席

快晴がささげる木漏れ日

窓から入り込む陽光

1面を白で塗られた建物の中で還暦を過ぎた女性は赤い電話を片手にある男性と話をしていた

その声色からは切羽詰っている状況がうかがえた

「先日の国防長官の案件は受け入れてくれるのかしら？」

その女性、キアリー・ヒューストンはアメリカの情勢を支える1人で支える

歴代屈指の凄腕大統領になるはずだったのだが

彼が選挙で当選して直ぐの事、アメリカはイランへの空爆を開始それに伴い沈静化を見せていた中東情勢はさらに悪化原油価格の高騰により、アメリカの金融情勢に追い打ちをかけ三流国家への道を徐々に進む形となつた

そんな中、国防長官が大統領へとある言葉をかける

「このさい世界を手に入れませんか？ いい案があるのです」

彼が大統領へと話を進めたのは即位後2カ月の話であった

「そんな事が可能なのかしら？」

「ええ、可能です」

国防長官の断定的な口調に心が折れた大統領は環境保持という名目で極秘裏に或兵器の製作許可を与えた

その後兵器の案件を日本の防衛大臣と吟味した結果今現在開発に至

つている

「ええ、何とか受け入れられそうです、それでですね資金援助の件は準備できているのでしょうか」

「心配しなくても大丈夫よあなたの国が事を起こしたとしても3年

は耐えられるだけの資金は用意してあるわ」

「そうですか、3年で事を進めなくてはいけませんな

「ええ期待しているわ」

チャプター1「仮想戦争」

ふと気がつくと、俺は戦火の中にいた

「爆発するぞ！！」

鳴り止まぬ轟音、耳元を吹き抜けていく銃弾

まさに不快と言つしかない現状の真つただ中に今俺はいる

第一次世界大戦が終了して、世界は一時的な平和を手に入れた
だが、それは一時的な平和といつていいだろう

大戦以降も戦争は各地で勃発し、絶える事のない民族紛争は今でも
続いている

そんな中、遂にアメリカが戦争の火種を落とした

そう、みんなの記憶に新しい「イラン空爆」である
空爆以降、世界の情勢は乱れ原油の値段は高騰し、混沌とした世界
情勢はついに

第三次世界大戦を引き起こした

ロシア、中国を代表とする連軍、新世界連合軍は、アジア全土を一
瞬にして飲み込み
領土を拡大していた

一方

アメリカ、EUを代表とする連軍、国際連盟軍は、新世界連合の数
で圧倒する戦略に苦戦していた

この頃の日本といえば酷いものだ

防戦虚しく、新世界連合の植民地と化していたのだから

元々の軍事力はあるのに、同盟国、アメリカとの距離や、中国の軍事力の増大に対処しきれなかつたらしい

そんな中、俺は戦場に立つて
いる

しかも中国の大都市内

既にここも廃墟と化してしまつた

そんな俺達の任務はと云つと新世界連合軍の拠点衛星施設まで行き施設を爆破するミッショングらしい

今俺は傭兵だ！！

俺の隣にいる傭兵仲間は誰とも、何処の国出身なかも解らない
そして

一人、また一人、仲間がやられていく
「伏せろ！！」

隊長の掛け声で隊が動く
そんな隊長の掛け声を聞いて
一斉にみんな伏せるのだが
そんな中、身を伏せずに撃ち続ける奴
ターゲット

案の定そいつは狙撃された

「バカが無駄死にしやがつて」
思わず口にしてしまう一言

「仕方ないさ、今は戦争中、目的の達成だけを考えろ」
隊長は冷静だった

「それよりもヤバイな、このままだとみんな狙撃されちまう

さつき狙撃された兵士を見て隊長がいう
「道の選択を間違つたか、その角を左に入つてビルの隙間に入る、
みんな着いて来い！！」

ここは広い大通り、大きなビルが建ち並ぶ繁華街だ
調度、その中心あたりにあるバリケードを盾にして銃撃戦をしている
そんな中、調和を乱して射撃を続けていた兵士の一人が敵軍のスナイパーに狙撃された

そこで隊長は中央突破の作戦を急遽変更して
ビルの路地を縫つて通り、隣の大通りへ行く作戦へと変更したのだ
作戦を変更しても戦況はたぶん変わらないだろう

俺達は隊長の後を追うように路地へと入つて行つた

そんな俺達を見て敵軍も隣の通路へと移動する

どうやら先に路地を抜けて待ち伏せする作戦らしい

路地を半分くらい進んだ時だらうか

先頭を進む隊長が急に止つた

「おーし、止まれ、引き返すぞ！」

隊長の一言で隊が動く

先頭は入れ替わり

路地を引き返す

俺達の隊は圧倒的に不利な状況だつた
敵軍の数はこちらの5倍はあるだらう
爆破ミッションであるがゆえに
大人数で押し寄せて行くなど考えられない状況なのだ

そんな状況の中、小隊が敵の中部隊に発見されてしまった
まず正面から行けば勝ち目はない、だろう

戦争とはそういうものだ

英雄などいない

数がいつも物をいう世界なのだから

路地を引き返す小隊

少し前に居た通りまで引き返す

路地から少し覗いてみると

案の定敵は分散していた

「守りの兵士は2人だけか？」

こちらの残りの兵隊は5名といった所

正面から行けば数で勝てるはずだ

そんな事を考えていた時だ

手前にいた兵士の一人が敵へと手榴弾を投げて牽制を仕掛ける
その瞬間脳裏に衝撃が走った

隊長も同じ事を考えていたらしい

「不味い事をやってくれたなー、あれじゃ一分散していた兵士が音
に気が付いて戻つてしまつ

隊長と俺はすでに路地へと逃げ込んでいた
先ほどの大通りから銃声が激しく聞こえる

前衛の3人は今も大通りで戦っているだろう

数秒後の後、手榴弾の爆発音を聞いた

果してあの状況下で何人が生き残っているのだろうか？

そんな事を考えている内に、路地から反対側の大通りへと抜ける先頭にいたのは隊長だ、隊長が先に路地へと足を踏み出した瞬間だつたか

スナイパーライフルの甲高い銃声を聞いた

ターン

それを後ろから見た俺は動く事が出来なかつた

次は俺の番なのか

結局こんな作戦無理だつたじやないか
いろんな事が脳裏を過つた

数秒の後、大通りから現れた敵兵は何も言わず
最後に見た光景は俺にライフルを向ける敵兵士の姿だつた
程なくして

俺は甲高い音を聞いた、＼＼＼＼＼。

一瞬だらうか

目の前が真つ暗になつた

少しの間の後

仲間を上空から見つめる事が出来た

キーボードの「Tab」を押すと

今残っている兵士の人数を確認する事ができるようだ

どうやら手榴弾を投げた組が敵の裏取りに成功したみたいだ

ディスプレイの左下にチャットが表示されていた

ID

島根の隊長「惜しかつたね（・3・）b」

Ore 「まあ次がありますからねw」

島根の隊長「敵のスナイパーが優秀でさ――」

ボルボ 「w」最初に撃たれた奴

鷹の爪 「うわ――ん」分散した時に味方の手榴弾をくらつた奴

敗者のチャット場が荒れる前にアナウンスが流れた
「レッドチームの勝利!!」爆破側
どうやら勝負がついたみたいだ

キール 「ブゲラ」敵のスナイパー

Kouji様が入室しました

Kouji 「んつごいもぢいいいいいwww」

Kouji様が退出しました

Kouji様が入室しました

島根の隊長「（-A-）」

Kouji 「お前ら弱すぎwwwwww」

島根の隊長「厨乙w」

Kouji 「（-、-、-、-）」

そう、これは現実の話ではない
ゲームジャンル
FPSというネットゲームの話だ
決して現実ではない

3年前の話だったと思う

アメリカがイランを空爆した

その事実は今でも世界に波紋を呼んでいる

そしてその事実をゲーム会社が取り上げて、10年後の世界を舞台

にしたゲームを作成した

そんなFPSにも色々あるが

今俺がやっているゲームが一番人気だ！！

さてもう一勝負しようか！！

チャプター2 「日常」

「はあ、、、。」

無機質な溜息が流れる

俺は、東京の短大に通う短大生だ

実家から離れて学校の寮で一人暮らしをしている

今はと/or>うと、先ほどのゲームを切り上げて

今晚の晩飯の材料を買う為に近くのスーパーに来ている所だ

アメリカのイラン空爆以降、世界情勢はかなり混沌としていて
表向きは核軍事施設への先制攻撃という主張も、前回のイラク戦争
での前科があるため

世界はアメリカを行動を冷ややかに目で見ざる負えなくなつた

だからといって世界戦争なんか起きるわけがない
愚かな過ちを世界が繰り返すとは到底思えない

空爆以降、日常生活も実感できる範囲で少しだけ変わった
原油価格が高騰して、1バレル＝110ドルを更新
リッターあたりの単価は180円を超えるまでになつた
今も少しずつ原油価格は値上がりしている
そのせいで今まで身近に使っていたガソリンがいきなり高級品になつた

ガソリンがまだ普通に使えた時代

少し高いなつて思えた時代だけど

俺は寮から学校まで原付で通っていたのに

今は歩きだ

原付でも月々のガソリン代が結構な額になる御時世

一人暮らしには堪えるので節約をしなくてはなるまい

このさい贅沢はいつてられない
むしろ生活が成り立たなくなる

そんな事を考えながら俺はズボンのポケットから煙草とニコロ
を取り出した

カチーン ジュツ ボツ

煙草を吸い始める

正直、煙草を止めるか、原付を捨てるか迷う所だつたけど
やつぱり原付を捨ててしまつた

まあいいか、ガソリンなんてその内安くなるんだからさり、 、 、 、 。

そういうえば最近やたら電気自動車のCMを見るよつになつたつけ
今考えるとそんな背景があつたんだな～

流石に今までは不味いと思つたのだらう

世界の大手自動車メーカーを始めとする、自動車会社各社は電気自動の生産をこぞつて開始した

価格も今のガソリン自動車の2割増しくらいだ

最初の内は電気駆動を7割、補助用のガソリン駆動を3割というハイブリッド方式のシステムで推移するのだといつ

気になる電気スタンドだが、車購入時に駐車場に設置され

充電時間は約6時間

満タンでだいたい100kmを走行する事ができるのだといつ

長距離利用の場合以外だつたら現状のシステムでも十分実用できるのだろうが
やっぱりガソリンへの拘りは捨てがたい

スーパーからの帰り道、良く通る踏切り

カン カン カン カン カン
踏切の閉まる音で足を止める

良くこの踏切には足を止められる事がある
東京都内の踏切はまさに地獄だ！！

なんたつて電車の本数が多いのだから
踏切の閉まる回数ももちろん多い

よつて、一般的の通行人は不本意ながら足止めを食らつのだ

最近では電車の利用客も増えた、ガソリン系の運搬システムが減退
してきたからなのか

環境問題のせいなのか、特に自動車は最近の若者に受けが悪い
自動車を利用する人よりも電車を利用する人の数が圧倒的に多いのだ
自動車は渋滞があるが、電車なら確実な時間に目的地につけるとい
う話も良く耳にする
はたして本当だろうか、・・・。

ガタン ゴトン ガタン ゴトン ガタン ゴトン

俺の目の前を電車が駆け抜けて行き

閉まつていた踏切が開き、足早に踏切を渡り切る

渡りきつてすぐ、踏切の閉まる前の甲高い音が俺の後ろで鳴つた

チャプター3「水面下」

アメリカ - ホワイトハウス -

1人の屈強な男が颯爽と廊下を歩く
歩いて行く先の一室の前で足を止めた

コン コン

男は扉に向かつてノックをすると
扉の向こうからスグサマ返事が返つてきた
「入つて」

その声を聞いて、1人の屈強な男が室内へと入つていく
それほど若くはない

「失礼します」

男は部屋に入つて一礼すると、ハキハキした口調で言つた
「例のシステムが完成しました」

部屋の机に座つている女性へと声をかける
この女性もそれほど若くはない
年の頃60歳といった所だろうか?
結構な歳をとつているようだ

「思つたよりも早く完成したのね」

女性はシタタ力な口調で男の質問に答えた
「それで、運用は何時頃になるのかしら」

今度は女性の質問に屈強な男が答える

「今月中にでも、日本の自衛軍と共同演習を行い、実戦投入は来年
以降になるとと思われます!」

男は変わらぬ口調で

淡々と答える

「そう、今回のシステムには期待しているわ」

女性は変わらぬしたたかさで男へと問いただす

「先代の大統領はやってくれたわね、環境の事をまるで考えず自分の任期間近でイラン空爆だなんて、私達への当て付けだったのかしら」

男はその質問に困惑の色を隠せなかつた

発言にあまり自信が感じられない

「それは、、わかりませんが、彼にも彼なりの思惑があつたのでしよう」

女性の表情はあまり明るくないだろう、今の現状に幻滅しているのは明らかだ

「予定通り例のシステムの運用に移つてちょうだい、期待してるわよ」

「はっ、かしこまりましたキアリー大統領」

男は腕を直角に曲げ手の平を水平に額に付けて言った

軍隊でいう敬礼のポーズだ

少しの間の後、男は大統領に背を向けて足早にホワイトハウスの大統領室を後にした

日本・某所 -

そこは地下にある隠された研究施設の一室

1人の科学者と1人の助手が居る

科学者はイスに座り、アシスタントは立つた状態で机に手を付いて科学者に話かけている

「教授、AIの搭載までは行きませんでしたけど大丈夫でしょうか？」

助手の発言に科学者が耳を傾けて答える

助手の年齢は20代後半といった所だろうか

科学者の年齢は50代前半だ

「まあいいさ、今回の1件でA-Eは使えないにせよ、それ以上の性能を持つ物が使えるのだから何も問題ない」

少しの間が流れ、科学者がまた喋りだす

「むしろ良すぎるくらいだ、A-Eのレベルなんてたかが知れている、所詮人間には叶わないからね」

隣の助手は少し残念そうな表情をしているみたいだ

「そうでしょうか、私は思つんですけど、このよつたシステムに人間を起用するなんて

馬鹿げていると、・・・。」

その発言を聞いて科学者の耳が少し動いたんだろうか

その瞬間的な動作は科学者の心の動搖を映し出していた

だが暫くしてまた淡々と会話を続ける

「科学の発展に犠牲は付き物なのだし、それがわからない内は君もまだまだ科学者とは言えないね」

その発言に答えるように助手が喋り出す

「こんな形でこのシステムを、彼らを使いたくはありませんでした
もつと別な方法が、・・・、あつたと、思います」

助手の口ぶりはとても残念そうで

最後の方はかなり声のトーンが下がつていただろう

そして少しの会話の後

助手が部屋のドアを開けようとした時

科学者の声で足を止める

「私はもう君の教授じゃないんだ、同業者として名前で呼んでもらいたいんだがね」

それは、とても無機質な口調だった

そして助手が答える

「ええ、失礼しました高島さん、それでは失礼します」

「ああ、期待しているよ鈴木君」

キイツ ガタン

科学者の少し後ろで扉の閉まる音がした

「ふう」

科学者は助手のいなくなつた室内で独り言を呴いている
「若いっていうものは良いものだな」

研究施設の一室には科学者が一人、イスに深くもたれかかつて

PCの画面をぼんやり眺めている

PCの画面には乱雑なパラメーターが表示され、それを眺めながら
また呴く

「私だつて平和利用のために使いたかつたさ」

「それよりも明日の演説はどうしたものかね、 、 、 」

チャプター4「徵兵」

俺は家に帰り、PCの電源を入れた

ブゥン

PCの起動音が鳴り、ディスプレイの画面はバイオス表示からPS入力画面へと移行する

しばらくPCをそのまま放置し

先ほどスーパーで買った商品を冷蔵庫へと仕舞う事にした
リンゴ、ジャガイモ、ニンジン、玉葱といった感じにどんどん冷蔵庫へと納めていく

そんな作業中だったが、ズボンのポケットに入っていた携帯が激しく振動したのだ

俺は普段から携帯はマナーモードにしていた

正直、着信音なんて迷惑なものだ

それ以前に一々設定するのが面倒臭い

電話かメールかも携帯のバイブルーションのリズムでだいたいわかつてしまふのだから必要ないと言つた方が良いだろう

今回の振動のしかた、メールだ！！

一体誰からだろう、少しづくづくしながら携帯のメールを確認した

差出人は島根の隊長だった

島根の隊長（以下島根）

島根とは長いネットゲーム仲間だ、知り合つて4年くらいだらうか
特に軍隊関係物には目がないらしい

良く一緒にゲームをしている

いまやっているネットゲームだつて島根に誘われて始めたものだ
仮想の戦争世界を良く2人で走りまわつたつ

島根は良く仕切りたがるので、仲間が望んでいようが、いなからう
が指示を出してたつけ

最近では2人でクランを作ろうかといつ話も上がつていたくらいだ
だからといって、メールのやり取りをする仲ではない
今まで島根からメールが来たのは数えるほどしかなかつた
いや、その必要がなかつたと言つた方が良いだろうか
PCをつければメッセンジャーを通じて島根側から話かけてくるの
だから
メールでのやり取りをする必要があまりなかつたのだ

そんな事を考えながら、メールの内容を確認する事にした

以下メール内容

差出人：島根

件名：人生オワタ￥（^○^）／

本文：ちょ、おま

今、家のポスト確認したら

赤紙が入つてたんだが

（- A - ）ウゼツ

おまえんちどうよ？

書いている本文を読んで、内容をいまいち把握できなかつた俺は迷
つた末島根に返信しなかつた

結局の所、冗談だと思つたのだ

PCを立ち上げればいつも通りメッセンジャーで勝手に話かけてく

るだらう」

やがて買い出した商品を仕舞い終え
PCにパスワードを入力する
いつも通りの効果音が流れ、自分のプロファイルが表示された
その後しばらくして
案の定島根がメッセンジャーで話かけてきた

以下島根とのメッセンジャーである

島根「おい、メール見たんか！！」

Ore「ん？」

島根「メールみたんか？」

Ore「ん？」

島根「（ - A - ）」

Ore「ああ、ごめん、見たよ見た見た」

島根「俺の青春を返せ。」

Ore「そういえば赤紙つてなんなの？」

島根「（ - A - ）ハツ それは徴兵だろ」

Ore「は～つ？徴兵！？、遂に脳みそまでやられたか、、、。」

島根「http://www.*.*.*.*.*.news
ソース」

島根「そういえばお前何県？」

Ore「出身は茨城、今東京」

島根「あー、俺は北海道だから駐屯地は別の場所になるな」

Ore「ほむ？」

島根「それじゃ、親とかに連絡せなあかんから次は戦場であおづぜ」

島根様がオフライン状態になりました

島根がオフライン状態になつた後も俺は島根の言つた事が信用でき

なかつた

何かのイベントに浮かれているのだろう
変な冗談も体外にしてもらひもんだよね、まあそんな感じだ
そんな事を考えながら島根の残したＵＲＬの先を確認する事にした
たぶんニュースサイトに繋がっているのだろう

俺の思惑は的中してネットでメジャーな普通のニュースサイトが表示された

そのサイトに書いてある事を瞬時に確認する
いや、脳が勝手に働いたといつていいだらう

3秒ほど時間が流れてからだらうか

書いてある内容を思わず口にだしてしまった

「あー、国会が自衛隊を急速自衛軍へと変更

それに伴い徴兵制度を開始、アメリカの要請を鵜呑みにする形に、、、

、。

ニュースの日付を確認すると、発表されたのは今日の午前中になつていた

はつ、徴兵だつて！！

この国はそもそも自衛隊で間に合つてたではないか

それをいきなり軍に格上げして、徴兵制度を開始するなんて

何を考えているんだ、国会は！？

俺は急な不安に駆られ、さらに情報を仕入れるためにテレビの電源を付ける事にした

チャンネルを「ロコロコ」變えていく、ビニもかしこも
徴兵の話をやつていた

やがて特番という文字をテレビ画面で確認してチャンネルを変える

のをやめる

特番は自衛隊が軍になつた経緯やら、徴兵についての話を詳しくやつていた

特番の内容が

特番の音声が嫌でも耳に入つてくる

テレビの向こうでは、出演しているアナウンサーと、軍事ジャーナリストとの会話が淡々と繰り広げられていた

「いやー大変な事になりましたね、古河さん」

どうやら軍事ジャーナリストの方は古河といつりしきビシツと着込んだ黒のスーツに赤いネクタイが印象的だ

「いやね、柳川さん、大変な事じやないんですよ」

古賀は少し早口な喋りで柳川に言った

それほど低くない声は、とても聞き取りやすく

それ自体が今の俺にはとても痛く聞こえた

「日本が徴兵制度を開始だなんて、一体何所にそんな資金があつたのだが、今の状態では一瞬にして破産ですよ」

「いやね、古賀さん、一説にはですよ、アメリカからの莫大な資金援助があつたとか噂されていますけど」

柳川が古賀へと問いかける

「ええ、聞いていますよ、ですかあくまでも噂です、アメリカの情

勢は今とても苦しいですからね、・・。」

「どうやら古賀の方は少し御立腹の様子だ

今までの軍事ジャーナリストとして活動してきた中で起った時代の大事件が許せない様子だつた

それに古賀本人からしてみれば長年の軍事分析を台無しにされ、顔に泥を塗られたと言つていい状況なのだから仕方のない話だらう

「古賀さん、少し話を変えましょ」

柳川が古賀へと振る

「ええ、いいですよ、私が答えられる事でしたら何でも」

「では質問します、何故今になつて自衛隊を軍へと変更したのでしょ」

「この徴兵制度の意味するものはなんだと思いますか?」

柳川のキラー・パスが古賀へと飛ばされた

その質問は誰もが気になる事だつた

「それもただの徴兵制度ではないですよね?」

「なぜこれほどまで年齢の制限幅が広いのでしょうか?」

少し喋つて、柳川が黙り込む

そして古賀の返答を待つ

しばらく考え混んだ後古賀が喋り始めた

「まず、今まで徴兵制度を導入しなかつたのが不思議なくらいです

古賀は重い口を開くと

先ほどの意見から一転して徴兵制度を肯定し始めた

「日本は世界でも有数の軍事大国に囲まれています

特に中国、北朝鮮は要注意と言つても良いでしょ
そんな中で日本には軍隊というべき存在がないのです
いざ戦争にでもなつてしまつたら、一瞬にして植民地になつてしま
うでしょ」

柳川が割り込むような形で答えた

「といいますと、近々大きな動きがあると
たとえば戦争とか・・・。」

「戦争だつて！！」

俺は思わず叫んでいた

テレビを掴み、その奥を見つめる事しかできなくなつていた

俺と同じ用にほとんどの人が今テレビへと釘付けになつているだろう

テレビの中の会話はあまりにもバカバカしく
とても信用できるようなものではなかつたのだが
全テレビで放送されているその事実はどうしようのない事だつた

ガサ ガサ ノトノ

俺はしばらくテレビを両手で掴んでいたのだが
扉に設置されているポストに何かが入つてきため
配達物を確認するために玄関へと移動する事になつた

俺がテレビの前から立ち上ると同時に

テレビの向こう側の軍事ジャーナリストがまた喋りはじめた
「それも可能性の一つです、まあ、世界への牽制、高まるアジア不
信への抑止力といった所でしょう

アジア不審？

そういうえば原油の高騰で、各国はエネルギーの確保に躍起になつて
いるんだっけ

その一つが武力による威嚇だつたような

そんな事を考えながら送られて来た物を確認する

案の定、ポストの中に赤い紙が入つていた

赤紙とは聞いていたものの、まさにこの絶妙なタイミングで本当に
来るもんなんだな、・・。

俺は玄関で赤紙を手に持つたまま、しばらく睡然と立ち尽くしていた
動く事ができない

PCの置いてある六畳一間に戻る事が出来なかつた
部屋の奥のテレビからは今も柳川と古賀の会話が流れていた

それにこの赤紙は少し変だつた

赤紙というくらいだから、薄っぺら一枚とばかり思つていた
のだが

少しばかりの厚みがあり

パンフレットに近い代物になつていた

恐る恐る中を覗いて見ると

表紙のちょうど裏側に軍隊への入隊届と書かれていた
指名や住所を記入する欄があつた

対象年齢の幅はがやはり広かつた
テレビでも少し

取り上げていたのだが、そこまで詳しい話はしてなかつたので気に

はなつていた部分である

どうやら、赤紙によると今回徴兵を受けた対象者は「18歳以上」
35歳「高校卒業以上の専門学生に限るとの事らしい
まあ、当たり前か

急に無対象に人を∓#25620;き集めたら、日本の企業
が大打撃なのだから
とはいえ、新入社員が一時的に雇えない状況は十分企業にとって痛
手になるかな

次に目に入ってきたのは軍隊区分である
対象学校表という物が一緒に織り込まれていた

その表には東京23区すべての学校名（大学・短大・専門）が羅列
されており

隅っこの方に軍隊名と配属部隊が記入されていた

俺は直様自分の学校を田で探した

「えっと、海王学園はつと」

やがて自分の学校を見つけて確認すると

配属は陸軍、特殊部隊と書かれていた

まあ野戦部隊に配属しなかつたのは不幸中の幸いだったと思う
そんな事を考えながら中国の軍隊の映像なんかを思い返していた

やがて赤紙を読んでいくと愈々最後のページへと差し掛かった
今までのページはとすると、訓練内容やら給料やらが書かれている
だけで

肝心の徴兵日が書かれていないのだ
この様子だと俺はいつ何所へいって不服を申し立てれば良いのかも
わからなくなる

そんな事を考えながら最後のページをめくつた俺はまた叫んでいた

「明日…！」

ちょっと待て、いくら何でも急すぎるんじゃないのか、。

明日って学校はどうなるんだよ

心中で色々な事を考えていただろうか

一瞬、明日のスケジュールの読む俺の目がある数字を見て止まる

「6時45分」

その数字は明日の朝の始まりを意味していた
バツクれた方が良いのでは？

このまま実家に帰った方が無難なんじゃないのか
そんな事を考える俺に追い打ちをかけるように
注意書きには

「逃げた場合全国指名手配になります」

さらにもう一つに

「明日の朝迎えに行きます」
と書かれていた

次にその隣の軍隊新規開発兵器の欄があり
デカデカとガンムを作ると書かれていた、。

こんなふざけた奴らが明日来るのか

急に疲れが噴き出して来た俺は、部屋の奥にある自分のベッドで少
し横になる事にした

PCの電源もテレビも付けたまま

テレビの向こうでは今も専門衛隊の異常行動を報道し続けている
PCからはいつもと変わらない起動音が流れていた

そういえば島根の隊長ひで島根出島じやなかつたんだ、 、 、 。

そんな事を考えながらベッドで田をつぶると急に睡魔に襲われたため
今日はそのまま寝る事にした

チャプター5「絶望のバス」

その鐘の音を聞いたは朝になつてからの事だ

寮の玄関に設置されているチャイムの音が
けたたましく、室内を過ぎ去つていく
その高音は俺の安眠を妨げ、深い眠りの中から外の現実世界へと引
きずり出してくれた。

時計を見るともう6時35分を回つていた

寝ぼけ眼で玄関へと向かい

覗き穴で外にいる人物を確認する前に返事をした

「だれですか？」

朝、早すぎる時間の来訪客に少し不安を覚えながら
おぼろげな口調で尋ねる

ドビラの向こうに居る不審者はあっさり答えてくれた

「自衛軍です」

その言葉を聞いた俺は、昨日の事を思い出した

「あ！？」

覗き穴から外の様子を窺つと

扉の向こうには自衛官が一人、綺麗に敬礼の姿勢で立つていた

「今日入隊だと聞き、お迎えにまいりました」

「であります」とか言わないのかな、ヽヽヽ。

自衛官といえば「であります」といった感じだと思っていたのだけ
れど

恐る恐る扉を開けると、扉の向こう側の自衛官は爽やかな笑顔で接
してくれた

「朝早く大変ですね」

扉あけた俺の顔は急に田覚めたせいで
未だ皺くちゃで、はつきりしない表情をしていた
呑氣だと思われたかもしれない

「いえいえ、仕事ですから」

ハキハキとした口調で

続けて自衛官が喋りだす

「それよりも準備はできていますか?、当分ここへは帰つてこれないでの」

呆然と立ち尽くしている俺に問い合わせてくる

「え、ええ、まあ」

淡々と喋る自衛官

「そうですか、赤紙にも書いてあつたと思いますが、私物の持ち込みはいつまでできませんので」

自衛官は更に淡々と話を進めていつたせいで

俺の頭は回りきらずに話の内容がまるつきし入つてこない
さらにもう一つ言つてしまえば、私物の持ち込みを禁止しなつている時点で
準備するものなど全くないので

啞然と見つめる俺に

一拍の間を挟んで自衛官が答える

「家族への連絡はすんですか?」

その一言で大切な人達を思い出した、。。。

あつ、親に連絡するの忘れてた
昨日はあのままずつと寝てたし、。。。

「いえいえ、まだですけど」

慌てて、部屋の奥で野放しになつてゐる携帯電話を手にとつて電話をかけようとする

そんな俺を自衛官が注意した

「ダメだよ～、ここら辺一体は情報規制がされているから、電話類は一切使えないんだ」

そんな事を言って自衛官が自分の持っている携帯電話を貸してくれた確かに自分の携帯電話のアンテナは圏外になっている

早速実家へと連絡をしてみると電話の奥で聞きなれた声の主からいきなり質問攻めだ

暫くの会話をしただらう

親を安心させるだけでかなり精一杯だった

自分が直接軍隊に関わらない事とか、まあ色々。

電話を切り一言おれいを言つて、電話を返却する

「ありがとうございました」

「ごく一般的な人への挨拶だ

「それでは行きますか」

その後自衛官へと連れられて

寮の外へ出た俺は、寮の前へと止まっている自衛軍の車両を確認した

映画でしか見た事の無い装甲車だ

さらにはその後ろには自衛軍のバスが何台も列なつている

俺は自衛官の後ろをゆらゆらと歩き

自衛官はそんな俺をバスまで誘導する

ふと異様な光景を目にして立ち止まつた

そんな俺は

「隣の部屋が、、。」

それは普通のお隣さんの部屋だった

俺の住んでいる寮は各階6部屋の一階建てになつている

そして俺の部屋はと、1階の102号室

1階の正面から入つて2番目の部屋だ

その部屋は調度自分の部屋の左隣に位置していたので

外へ出掛ける時は必ずその部屋を横切つて行かなくてはいけないのだ

確かその住人は女の学生が住んでたと思つ

全てが俺の通つていた学校の生徒なので大体の寮の人の顔は覚えて

いる

そしてそいつの事もハッキリと覚えていた

覚えていたといつても隣に住んでいるのに挨拶もろくにしていない

俺は

印象に残つている程度といったところなのだが

その部屋の扉を見るや、俺は言葉を失つていた

「、、、。

その部屋の扉が打ち抜かれていたのだ

見るも無残な姿になつていて

車が正面の扉に突つ込んだ後のよう

ポツカリとその部分だけがないのだ

気になつてしまつたので俺の先頭を歩く自衛官に部屋の事を聞いてみることにした

「この部屋、どうしたんですか?、扉が無いんですけど、、。」

その時の俺の口調はとても弱々しかつたと思う

確かにその扉、昨日買出しに行つた時には、はめ込んであつたはずなのに。

少し言葉を選ぶ素振りをしたあと

自衛官が答えてくれた

「ああ、そこの部屋ね、チャイムを鳴らしても返事が無かつたから扉をくり貫いたんだ

よ、案の定中に住人は居なかつたけど少しの溜め息の後、自衛官がまた喋りだす

「困つちやうよね、後で探す身にもなつてほしいよ
困つてしまつのはこっちの方だと心の中で咳きながら逃げなくて良かったと少しの安堵を噛み締めた

またトボトボと自衛官の後ろを歩く俺

やがてバスに乗り込むと、見知つてゐる顔の多さに驚いた
まあ仕方ない話なのだらう、学校全体が徴兵されているのだから
状況が状況なら軽い遠足である

少して先ほど俺を誘導した自衛官と上官らしき人が入り込んできた
「それにしてもこのバス誰も喋つていしないな」

そんな事を呟く俺の正面で

自衛官と上官らしき人が会話をしている

話の内容が良く聞き取れる

「ここでの徴兵は以上であります！！」

「ご苦労、それでは出発する」

どうやらこいら一帯の徴兵は以上で終了したという事らしい

説明もなくバスのドアは閉まり
エンジンの音が座席全体に伝わってきた

いよいよ発進するらしい

発進する直前各座席に田隠しが手渡され説明が入る

「今回君達が運ばれる先は軍の重要施設である、機密には最善の注意をはらい君達には

田隠しをしてもらつ

この状況下で逆らう者が誰一人も居なかつたのは奇跡というしかな

いだらつ

まあ逆らひのなら、予め逃げ出しているか

文句言つて殴られるのも嫌なので

みんなしぶしぶ目隠しをする

目隠しする直前の眼光は目の前の自衛官を直視していた

しばらくして絶望のバスが走り出した、詳しい到着場所も告げずに

チャプター6 「マークスの拳銃* 高島のトランシーバー」

今バスは目的地も告げずに走っている

そして

バス内の空氣は異様だつた

後ろの席からはイビキがちよくちよく聞こえる

こんな状況の中、眠れる奴はうらやましい

異様な空氣の原因が、このクラシック音楽のせいなのか
それともこの状況下で静か過ぎる事が異様なのかは良く分からぬ

自衛軍が気を利かせてくれたのだろう

俺は今トロトロと走るバスにゆられ、少しは聞いた事のあるクラシック音楽を聴いている

そんな状況が出発してからはや一時間異常も続いていたのだ

次の曲がり角も分からぬ状況なので、無防備な状態を遠心力にやられ

自分の首の耐久力は徐々に減っていく、首にはシートベルトはないのだ

そんな事を考えている内にバスは止まった

軍の重要施設へは1時間半くらいの道のりだつただろうか

近くに設けられているのがかなり意外ではある

暫くして上官から命令、否、説明があった

「もう、隠しあつてもいいぞ」

そういわれ目隠しを取つたとき、おのずと疲れた溜め息が出てきた
バス内中から溜息が聞こえる

そして目を開けここが何処なのか咄嗟に外を確認する
だが外に太陽の光はなかつた
あるいは頭上から降り注ぐオレンジの証明と
バスでも簡単に運搬するほどの大型のエレベーターだけだ
四方を巨大な壁で囲まれて
徐々に下へと下向していく

東京都内から1時間半の場所にこんな施設があつたとは
下向していくエレベーターは地獄の淵へと俺達を運んでいるのかと
見間違つほどに出かかつた

10分くらい下向してやがてエレベーターが止まり
前方の扉が開く、いつもな浴びなれた螢光灯の証明がバス全体を照
らした

だが、まだ到着ではないらしい

そこから15分くらい曲線を描く一車線道路を走り
やがてバスが駐車場らしき場所へと到着した

駐車場から外を覗くと、外には巨大な建造物が姿を現した
よくもまあこんな巨大な施設を建設できたものだなあと
内心呆れを覚えたくらいだ。

それにもしても、ここは何処なのだろうか
エレベーターは10分近く降りていただろう
たぶん地中にいるのだろうけど
地中だとしてどれくらい深くにいるのだろうか

エレベーターの速度はあまり早くなかつたと思つたが

バスを降りた俺達を待ち受けていたのは

円形状の軍用施設だ

（施設はドーナツ状に作られており、中心部分に大型のホールが設けられている）

唚然と立ち尽くす俺達を

自衛官が一列に整列させ奥のホールへと誘導する

その誘導の合図に逆らひう事もせず、学生はみな中央のホールへと歩いて行つた

やがて俺は視野でホール内を確認できる所まで来ると
すぐ様にホール内の空気が俺達を包んだ

その空気はザワザワしていく

中からはヒソヒソ話、メソメソ話がそこりじゅうから聞こえてきた
まあ無理もないのだろう

急に徵兵になつて、今までが静かすぎたのだから

そんな事を考えながら、俺はホール内を見まわした
良く見ると女性も結構居るみたいだ

そういうえば今回の徵兵、男だけじゃなかつたらしい
朝わかつていていた事なのだが、今の自衛軍とやらは女すら戦力に使う
みたいだ

奥のホールはかなり広く、二階建てのドーム状に作られていた

中はかなり広くできており、1万人以上の人間が今ホール内に収容されている

そんな中で俺は列になつて中央付近で立つているのだ

やがて誘導が終り、自分の席へと案内されると、正面のパイプ椅子へと腰をかけた

今俺の正面25メーターくらい先には壇上がある
その中に演台が設けられていて、演台の上にはマイクが設置されていた

壇上の右端には黒い布で覆われた1m80～1m90くらいの大きさの置物が置いている

生憎、置物には布がかぶせられていて、それが何かはわからないようになつていた
良く見てみると人の形をしているようにも見えるが
それはありえないか、・・・。

壇上から25メーターくらい、自分の後ろには100人近い人の列
が有り

四万を2階まで人で囲まれていた

俺は最前列から大体18、9人くらいの場所にあるパイプ椅子に腰を掛けている

それにしてもあの置物はかなり気になるな
いつたいなんなのだろうか

暫くして2人の足音と共に
ざわめきが消えた

足音は重量感のあるドシ、ドシとした音ともひつ片方は、小柄な男性
特有の軽い音だ

やがてその足音の正体が壇上へと姿を現した
今壇上には2人の男の姿がある

どうやらこの二人がこれから何かをはじめるらしい
これでこの施設へと運ばれてきた理由がわかるだろう

イスへ腰を掛けている俺はやがて2人の男性へと目を向けた
2人とも50才前後といった所だろう、一人は白衣を着ている
その隣の男はというと、外人だ、たぶんアメリカ人だろう
白人と黒人のハーフといった感じで肌は少し黒く、髪は軽めのリー
ゼントがかかっている

びしつと着こなしている軍服が特徴的で
腰のあたりに拳銃のホルスターが見えた

中身は入っているのだろうか

一方の白衣を着ているほうはというと
着ている白衣はヨレヨレで、髪は少し白髪交じり、髪型は天然アフ
ロと言った感じだ

気になるアフロの大きさなのだが、大体13ミリといった所だろう
壇上に立っている男の格好は対照的で、ハーフは身長がでかく、白
衣を着ている方はというと、やはり小柄だった

やがてハーフが、ビシッと決めた軍服を靡かせて
演台の中央へ立つと、マイクを握り絞めて
いきなり喋りだした

「諸君……おはよう、そして始めてまして」。

司会者はいないのだろうか、。

いきなりの大声に鼓膜が破れそうになつた

そして少し冷静になつて考えてみる

あれ？ あの人外国人だよね？

そう、彼は壇上に立ち、俺達に語りかけている
それも、普通の日本人とまるで変わらない口調で

「入隊おめでとう、と、言つべきかな」

壇上でいきなり始まつた演説に終止唾然としている俺たちを尻目に
25メートル先の外国人は淡々とスピーチをしている

「私の名前はマーキス、マーキス中将だ」

外国人はマーキスという名前らしい、そして階級は中将だという
「この中でここへ呼ばれた理由を知つてているものはいるかな？」
一声に「はあ？ 」と、いう空気が辺りに立ち込めただろう
目の前の外国人は何を言つているのだろうか

ホール内の空気は臨界点付近まで沸騰してきているだろう
いつそのまま、暴動が起きてしまうのではと思つたくらいだ

そんな中俺は冷静になつて辺りを見回していた

ホール内の出入口は1階2階合わせて16あり

出入口に格2名ずつ、自衛軍、アメリカ軍兵士が取り囲んでいた

アメリカの軍兵士はM16A1を肩から下げていて
日本軍も良く見慣れないライフルを肩から下げていた、多分第86
式小銃だろう

まあこんな重火器を構えた連中を前に騒ぎ出そうとこう度胸を持ったツワモノは一人もいないうけど。

壇上ではマークスの演説が今だ続いている

「諸君、君たちの国は腐敗しきっていた」

マークスは一拍の間に続けて言った

「諸君の国家日本は巨額の負債を抱えていた。そんな中、我が国家が多額の資金援助を約束したら、見事に君達を軍隊へ一時的に預けると約束してくれたよ」

詰る所、負債で苦しくなった日本の国会がアメリカの多額の資金援助に目がくらみ

アメリカが主催した徴兵令に強制参加させられる羽目になつたのか

「恨むのなら我々を恨むよりも、この国の政治化を恨みたまえ民主主義とは良い物だな諸君！」

マークスはそう発言すると、いきなり高笑いをはじめた

そんな高笑いが癪に障つたのだろう

1人の学生からヤジが飛ぶ

「好い加減な事を言うなーーー！お前達がやつてゐる事はれつきとした人権侵害だぞ、」

その学生に続くよう「そうだー、そうだーーー」と初めに立ちあがつた学生を皮切りにそこら中からヤジが飛ぶ

やがてざわめきは頂点に達し、ホール内に居る学生全員が一声に大

ブーイングだ

もう、マーキスの演説といった所ではなくなつてしまつた

壇上のマーキスが何を言つてゐるのかも聞き取れないくらいに騒がしくなつた時

マーキス中将は深い溜息と共に黙りこむと

腰に掛けているホルスターから拳銃を取り出して天井日掛け勢い良く引き金を引いた

ズダア - - - - -

続けざまに一発、ホールの上空日掛け発砲した

ホールという構造上、発砲音は反響し四方から爆発音が耳へと返つてくる

鼓膜が破れるくらいの発砲音はやがて收まりあたりは一瞬にして静まり返つた

やがて効果観面といった具合にマーキスはニヤケルと先ほどの演説を再開した

それにしても、本物の銃声つてこいつも重たいものなのかなゲームとは比べ物にならない。

「いいかね諸君、諸君の国は我が国家に守られている事を忘れてはならない

世界でも有数の軍事大国を眼下に諸君らは恐怖を覚えないのかね？」

平和ボケも大概にしてもらいたい！」

壇上ではマーキス中将がビシツと着こなした軍服をなびかせウロウロと歩きながら喋つてゐる

「そこで、我々は考えたのだ。決してこれ以上國土を脅かされない

方法を

世界への軍事的抑止力、核兵器以上のものを我々は考えたのだよ」

少し間を置いてマークスがまた喋りだす

「詳しく述べて高島に説明してもらおうか」

「そう言つと、マークスは自分が先ほどまで使つてた演台の席を明け渡した

白衣を来た男、名は高島といつらしく

「あ～、君達、遠方からおまけにいらっしゃつて、歓迎するよ」

高島という男性の声はモモモモモとした低い声で、マイク越しでも聞き取りづらかった

「私の名前は高島、高島現三だ、ここは実験施設の責任者をしている」

先ほどまでマークスといつ軍人が責任者だと思つていたのだが
どうやら責任者はこの高島といつ男らしい

高島が喋りだすと、マークスは壇上の右端に置いてある大きな置物の前まで歩を進めていた

「マークスが過ぎた事を言つた事をお詫びすがね、私は君達がこの施設に来てくれて感謝しているよ、選ばれた兵士としてね」

兵士、

その一言でホール内に同様が走る、

また一層どぞわざわしだすホール内

俺達は兵士なんかではない、れつきとした学生なのだ

ざわめき出す俺たちを見かねてか

高島が自分の腰に掛けていたであるアラジンシーバーを手に取ると

マークスへ一言

「マークスもういいだろつ、これ以上の演説は無駄だ」

高島がマークスへと合図を出しこ

マークスは置物の布へと手を駆ける

マークスの行動を見て高島が無線でなにやら喋つているようだ

「鈴木君、いいだろ、動かしてくれたまえ」

その言葉を聞いてマークスが置物にかぶせてある布を勢い良く取り
払つた

バツ、と布が宙を舞う音を聞いた
やがて黒い布は地面へと落ちると

布の中から姿をあらわしたのは、人間と大差ないくらいの「人型の
置物？」だつた

「なんだ！？あれ、、。」

見た目の肩幅も、大きさも人間と大差ない
四肢もまったく人間と変わらない

特に特徴的なのは四肢の奥だろ、人間でいう所の筋肉が普通に見
えるのだが

その部分には無数の黒いチューブらしき物が確認できた
そして頭部はというと大きな一つ目の目玉（カメラ）がアクリル
状の仮面に保護されている

あたりがまた少しがわざわとしてきただろうか

まさかこんな物を見せるために俺たちをワザワザ呼び寄せたんか？
少し不安を覚えている学生を尻目に

人型の置物が動きだす

壇上に設けられている階段をゆっくり下りる人型を直視する学生達
やがて階段をおりきり中央の通路へとゆっくり移動し

また止まる

ホール内から驚きの声が上がる

そんな俺も驚きを隠せない学生の一人だつた

壇上の人型の動きはゆっくりではあつたがとてもなめらかで
中に入が入つてゐるのではないかと見紛つたくらいだ

「まさか、あれ動くのかよ」

「なんだあのロボット」

「おいおい、これから何が始まるんだ」

あちこちでヒソヒソ話が聞こえる

壇上では高島が無線で合図をだしていた

「鈴木君、昨日の段取り通り頼むよ」

高島の合図を聞きロボットがまた、ゆっくりと、ゆらりと動き始めた
初めゆっくりと歩っていたロボットは

だんだんと地面を蹴る力が増していき、どんどん歩く速度が速くな
つていく

やがて先ほどまで歩いていたロボットは気が付けば猛スピードでホ
ール内の一本道を走つていた

シユタツ、シユタツ、シユタツ

「」のホール内は壇上から正面の出入口までの距離が約100メー
トルくらいある

そして俺の目の前の前のロボットは50メートルの距離を5秒で走り抜
けていった

そして60メートルくらい走つた辺りで勢い良くジャンプをし
3メートルくらい上空で一回転、宙を舞う

やがて空中を舞う人型はズダンという音と共に大地へと帰つてきた

勢い良く着地を決めると、ロボットは暫く動かなくなる

そんな、ロボットを熱心に見詰める学生へと自衛軍の隊員が俺達に
配つたのは、この施設内の資料だつた

サイクロプスに関する資料

サイクロプス (Cyclops) プロジェクト設定資料

サイクロプスとは完全遠隔操作型 一足歩行ロボットの事である

サイクロプスとは本来ギリシャ神話に出てくる一つ目の巨人の事を言つ言葉で

今回その巨人をモチーフにしたロボットを作成した

ロボットの名前はサイクロプス TSC (Test Soldier Cyclops) 以下TSCである

このTSCは特殊骨格を中心には40の人工筋肉を組み合わせて作成されており

人工筋肉には空気を入れる事により伸縮する特殊ゴム纖維を使用している、

この特殊ゴム纖維を使用する事で人間の動きを忠実に再現する事に成功した

骨格の中心部には空気を吸排するポンプが設けられており

そこから空気を各人工筋肉に送り込む仕組みになっている

各部位毎に小型ポンプが存在し、中心部で生成した空気を小型ポンプは蓄える働きをする

小型ポンプ内にはダイナモが存在し、強力な電力の発電もここで行われる

人工筋肉は人間の3倍の働きをするため、片腕で60kgの重量に耐える事が出来

さらに、歩行速度は人間の1・5倍、ジャンプ力はMAXで3Mだ

TSCにはCPUが2つ存在する

TSCの動力は電気であるため、TSC特有の電力輸送方式が存在する

地球の衛星軌道上に打ち上げた人工衛星が太陽光で発電した電力をレーザーで輸送する

輸送された電力を使ってまず第1のCPU（受信用）が稼働
この受信用CPUは電力の受信、命令の受信、そして輸送された電力を使ってメインポンプを動かす働きしかしない

メインポンプを動かして生成した空気はやがて、各小型ポンプへと輸送される

輸送された空気が小型ポンプのダイナモを動かす事によって強力な電力が発電されて

第2のCPU（送信用）が作動する仕組みになつていて
このCPUはサイクロプス内で一番電力を使う頭部のカメラの起動と、受け取った信号をコクピットへと返信する働きを持っている

コクピットは、信号さえ送信する事ができるのならばどんな形のものでも良い

極端な話、サイクロプスが目の前に存在するのならラジコンのコントローラーみたいな物でも良いのだ（本作サイクロプスには登場しない）

本作サイクロプスでは黒い卵型のコクピットを施設内に150機完備している

このコクピット内からTSCを動かし各地で作戦を展開していく事になる

(「クピットは移動可能）

このTSCであるが、消費電力はそれほど多くはない
それゆえに、人工衛星からの微弱な電力輸送で動かす事が出来るの
である

TSCにはモーター類が頭部以外ほとんど使われていない
構造がシンプルなため、モーター駆動系のロボットに比べタフな事
人工筋肉を使う事によって実現した、滑らかな駆動

ここまであげたTSCだが、弱点も存在している

TSCは駆動に使われているゴム纖維が命といつて良い
それゆえに耐熱性能は他のロボットに比べるかに劣る点は痛い所
である

それ以外にも各小型ポンプが電力を作っているので、小型ポンプの
破損による電力不足

メインポンプを破壊された事による根本的な問題

最後に挙げる、ありえない事ではあるが

人工衛星（Zeus Terra Star）NTSを破壊された事
による電力輸送が出来ない状態

これらがTSCの弱点である

それを補う為にも今現在開発途中ではあるがいくつかの対策が存在
している

対策事例については後に報告するものとする

外装および兵装についての説明

今回君達に見てもらつた、TSCはテスト用に今現在開発している地下専用のタイプだ

そのため外装などは特に取り付けられてはいない

これはサイクロプスの動作説明をより円滑に執り行つ為に施行された措置と考えてもらつてもかまわない

動力部分が直接見える方がわかりやすいだろう

（なお衛星のレーザーは地下にまで届かないため、テスト機にはバッテリーを使つていて）

（実戦機にも充電用バッテリーは存在する）

本来のサイクロプスには外装が取り付けられる事になる

この外装次第では10万発の弾丸にすら耐え

5トンの衝撃波、爆風にすら動じない機体を生み出す事が出来るのだ

さらに今現在開発中の物に外部ユニットと連動した耐熱性能を持つ外装も研究中である

TSCの兵装についての説明

TSCは人間と同じ動きをする事が出来るため、装備は一般の人間歩兵と変わらないものを装備する事が出来る

M16シリーズや自衛軍使用の武器は当たり前のようつに装備可能だ

さらに重量や衝撃に対する耐性が強いため

本来、装甲車両に積んであるM60などの大型機関銃も歩きながら撃つ事も可能だ

標準耐熱温度	：500度
耐久重量（片腕）	：100kg (両腕) : 250kg
脚部の耐久重量	：1000kg 骨組の耐久重量 : 800kg
必要電力 (CPU1)	：50W (CPU2) : 350W

チャプター7 「適正試験」

俺は一通りサイクロプスの説明を読むと
次のページへと資料をめくる

次のページには送信者側の説明が書いてあった
つまりコクピット側の説明である

そして説明文を読もうとした時だつただろうか
マーキス中将が喋りだした

「どうだね？ 我が国家と諸君らの国家が協同開発したサイクロプス
は」

ガヤガヤとした空気が一瞬にして静まりかえる

「これから諸君には適正試験を受けてもらひ」

試験？ 俺はすぐさまその言葉に反応していた

「な」に対した事ではない、このサイクロプスを各自、動かしても
らうだけの事

適正試験とは俺達がサイクロプスを動かす事らしい
そしてこの施設はサイクロプスの開発、研究する施設だという事が
書いてあつた

施設の名前は「メルトダウン」

マーキスが壇上で試験についての話をしようとした時だつただろうか
1人の勇気ある少女が勢い良く手を上げる、そして一言

「質問があります！！」

「ふめ、何かね」

手を上げた少女がマーキスの合図と共に喋りだす

「この大規模な軍事施設ありますけど、軍隊だけじゃこのロボット
動かせなかつたんで
しうか」

マーキスが少女の質問に答えようとした時だつただろうか

高島が演台へ割り込んで行きマイクを取りあげた

「いい質問だ、君の名前を伺つておこうかね」

少女は名前を聞かれた事と、高島といつ男の言葉に安堵をおぼえたのだろう

その顔はほつとしていた

「私の名前は草加、草加雅美つていいます」

少女の名前を聞いて、高島の顔が少し綻びを見せると

高島は演台で喋りはじめた

「最近の機械は複雑になりすぎている、サイクロプロスも同様だ
乱雑なパラメーターを逐一設定し動かすには今の自衛官ではおいつ
かないのだよ

君達みたいに新鮮な学生の頭脳でなければ

そう、天性の者が必要なのだよ！」

ここへ集められた君たちは電算系だと聞いているよ
そこで君達のゲーム脳を活用させてもらひう事にしたのだ」

電算系＝ゲームオタと云う考えはいただけないが
心の奥底では高島の発言には一理あるとも思つて
いた
内心、小さい頃からロボットが好きだった
目の前で動いているサイクロプロスを見て、苛立ちの中に踊る何かを
感じていた

やがて高島が少女に質疑をおえ、草加が席へとつく
次は1人の学生が手を挙げる

「ヒツ、質問を1つ良いですか？」

先ほどの少女に比べ声は裏返つて

その学生はかなり落ち着かないイメージだった
高島が学生に答える

「なんだね？」

「テツ、適正試験つて言いましたけど、試験に落ちる事もあるんで

すか？落ちた場合どうなつちゃうんですか、ヽヽ。

今度はマー キスが舞台に割り込んでくると、高島の代わりに答える見慣れない外国人の姿に学生は身を竦め、膝はガクガクと震えていた

「いい質問だ！！！」

マーキスが待つてました！！ とばかりの威勢で話を始める

「もちろん試験に落ちる事はある、その場合は自衛軍の格[軍隊へ適正を再度判断した上で配属される、その場合殆どが戦場最前線というわけだ、覚悟しておきたまえ」

ナレ、ナレ、そこだから歌が流れる

マーキスがまた喋りたした

名前を聞いていたが、たがう三は表題を譲り受けたが、

「 そ う か ね 」

そんな学生の姿を見たから俺はある事を考えていました

もし過正詰駄に落ちた場合には最前線送り
良くても駄中地で糸用を

いく方が得策か

どんな形であつても

高島達が壇上から姿を消してから暫くして適正試験が始まつた

この研究施設に集められた1万人近い学生は次々とホールから姿を消していく

1回の誘導で4人という少数、そして試験開始してから30分後、自分の番が来た

自衛官の支持に従い、パイプ椅子を離れ激動のホール内を後にした

俺を先頭に初めて顔を見る学生が3人後に付いて歩いてくる

1人は服に付いているフードを頭に深く被り陰気な雰囲気を漂わせている

その後ろを小柄な青年が続く、顔の表情は青ざめて終始地面を見つめながら歩いていた

最後に長身の男が付いてくる、少し猫背に体を曲げ、ズボンのポケットに両手を入れると周りをキヨロキヨと見まわしていた

顎の不精ひげが印象的だ

ホールを出ると自衛官がエレベーターへと誘導して、さうに地下へと俺達を案内する

やがて5人を乗せたエレベーターが下降を始めた

「こんな地下にある施設なのに、まだ地下があるなんて」

俺の後ろで誰かが喋つただろう、その声はエレベーターの下降していく音にかき消され

虚無の闇へと姿を消していく

たぶん小柄な青年がいつた言葉だろう

「なんやつちゅうねん、せつかく内定が決まつたちゅうに」

落胆した表情で俺の隣にいる長身の男が言った

男は暗い関西弁で喋つていた、大阪出身だろうか？

「私語は慎まないか！！」

秩序が乱れかけているのだと思ったのだろう

自衛官が俺達に激を入れる

その言葉を聞いてエレベーター内の学生をみな身を竦めた

小さくなる俺らを尻目に数秒後エレベーターは止まる

やがて、自衛官が先頭を歩いて行き

暗い通路の先にある第3演習場という所で足を止めた

恐る恐る中に入る俺達を置いて自衛官はドンドン中へと入つていった

中の説明はついておりず視界はぼぼゼロと言つていいだろ

自衛官はなにやら無線で話をしているようだ

「こひら第3演習場、説明の点灯をよろしく、どうぞー」

無線から「了解」という声が聞こえると、しばらくして説明が灯された

ぼんやりしている視野が次第に鮮明になる

俺の目に入ってきたのは黒い卵型の機械だった

それも1つではない

結構な数存在している

大きさの幅は1メートル、高さは3メートルといった所だろうか

それが第3演習場の中だけでも15台は存在していたのだ

俺は恐る恐る自衛官へと質問した

「この機械何んですか?」

先ほどとは全く違う表情を見せ自衛官は快く答えてくれた

「ああこれね、サイクロプスの無線送信装置だよ、つまりはコクピットっていうやつだね」

その言葉を聞いて口元が少し綻びを見せる

やわらかい表情、少しひヤケルていたと思つ

そんな綻びを見せた俺に自衛官が言つた

「さつき渡した資料あつたよね、それに書いてあつたと思つんだけ

ど」

自衛官のその言葉を聞いて手元にある資料を見る3人

俺達が設定資料に目を通している間に

技術者らしき人が3人くらい中に入ってきた

自衛官は技術者に挨拶をし

技術者は卵型の機械（以後「クピット」）の設定に入る
あれこれ、設定している姿を横田で確認する

「クピットの外面には製造番号らしきものが大きく書かれていた
第3演習場にはTSS-301～315までの型番を持つ
黒い卵型の機械、クピットが15台存在する

今回技術者達はTSS-301～304までの「クピット」の設定を
しているようだ

俺らが今現在4名なので、4番田までのクピットの設定といふわ
けだ

しばらくして、技術者が設定と確認を終えたら
俺達に声をかけてきた

「それじゃー、乗つてもらおうかな、そこの君こいつちへ来て」
そういうと、技術者の一人がクピットのハッチを空けて、俺へと
合図する

番号順というわけで案の定俺は一番最初に呼ばれたわけだ
呼ぶて前へと出た俺をクピットまで技術者が誘導する
俺は状況をあまり良く把握できず、その場に居る技術者に説明を求
めるように質問した

「あのー、操作説明とか他にも色々と説明する事があるんじゃない
ですか?」

俺の質問を受けた技術者は、暫く空を見るような仕草をした後
俺の質問に答えてくれた

「詳しい説明はアナウンスで流れるから心配しなくてもいいと思つ
よ」

そういうわれ半ば押し込まれるよつた感じで俺は黒い卵型の機械、通
称「クピット」へと入
る事となつた

「クピットのハッチが閉まる間際だつただろ? つか

先ほどの技術者が俺に声をかけてきて一言

「試験始まるまで少し時間があるから資料に目を通しておけば大体分かると思うよ」

そういうわれ俺は読みかけの資料をまた手にとり読み返す事とする
コクピットの外に居る技術者が軽い挨拶を終えた所で
いよいよ俺の乗っているコクピットのハッチは閉ざされてしまった
閉ざされたコクピット内は真っ暗で資料を読むどころではなかつた、
、。

チャプター8 「操作説明」

いつ終わるとも知れぬ暗闇の中で俺はもがいていた
先ほどの技術者は暗視ゴーグルでも持っていたに違いない
この暗闇の中でいつたいどうやって資料を読めばいいのだろう
そもそも今居るこのコクピットは何なのだ
サイクロプスを動かす装置だというのは確かなのだろうナビ
こんな素人にハイテク機器を動かせると彼らは本当に思っているの
だろうか

俺は逆鱗の中暫くブツブツと眩いでいただろつ

コクピット内の椅子に座つてから
すでに5分という時間が過ぎたであらう
未だ試験は始まらない
外ではたぶん俺の後ろを歩いていた連中が今頃コクピットに押し込
まれている所だろう
そういえば俺は彼らの名前を知らない
同じ状況で試験を受けるというのに
名前一つすら知らないのだ
自分の名前にはすぐに気がついたつていうのに

まあ、世間なんてそんなもの
気にも留めていなければ一瞬で過ぎ去つてしまつ
そう、この暗闇だつてたぶんそうだ

とは言つたものの、このままずつと暗闇が続くようであれば
考え方だ

なんて言つたつて今置かれている状況は新手の拷問に近いのだから

いや、新手でもないか、昔親に押入れに閉じ込められた感覚にちかい

そんな事を考えながらさうに5分の時間が過ぎ耐えられなくなつた

俺は

手当たりしだい触つてみる事にした

とりあえず正面を触つてみる

乗るときにチラリと見えていたのだが

正面には机らしきものがあつたのは確かなのだ

そこにキー ボードがあるのもわかつて いた

とりあえずキー ボードを叩いてみる

カチッ カチッ カチッ

全くもつて反応しない

電源が入つてない見たいなのだから当たり前か

キー ボード以外も触つてみる

ガン ドムッ ザク (注意・効果音です)

変なスイッチ音だけが無常にも流れていつた

「クピットに入りこんで、あたふたし出してから大体15分くらい
たつただろうか

正面から激しい光源とともに耳元からアナウンスが流れた

「全試験者の搭乗を確認完了しました。只今から試験を開始しま
す」

今は正面の光源のおかげで何処にどんなスイッチがあるのかも分か
るようになつて き て いる

正面においてあるキー ボードの配列は「一般的なJISキー」ボーデだ

た少し普通と違う部分を述べるならば
机にめり込んでおり、ノートPCみたいな一体型になつているといふ点である

さらに正面のスクリーンである、大きさは目測だが42型くらいはあつただろう

今はブルーのスクリーンが表示されており、その光源のおかげで先ほどの資料を読む事もできるようになつている

アナウンスの音源なのが調度自分の後ろから流れてきていた
椅子と一体型になつていてるのであるう、スピーカーから音声が流れ
てきている

音声は先ほど壇上で聞いた科学者の声が耳元でしていた
「やあ、気分はどんな感じだね」

俺は心の中で「最悪だ」と眩いた

「まずは試験に入る前に幾つか操作説明をしなくてはいけないね」

「まず君達の正面にあるキー ボードを見てもらえないかね」

高島の声通りに正面を見る

そこには先ほどのキー ボードが存在していた

さつき俺が暗闇に耐えかねて乱打したキー ボードだ

キー ボードの間を確認し終えると高島からまたアナウンスが入る

「キー ボードを中心 LEFTを見てくれないかね」

アナウンスの声の通りに左を見る

そこには黒い御椀形の出っ張りが存在していた

「それを開けてみてくれないか、上に開くようになつていてるからね
声の通りに上へと開ける、御椀形の出っ張りは簡単に開き90度の
直角にすっと止まる

開いた先に目をやると

そこには手の形と同じ窪みと、奥の方には薄らとスイッチが確認できた

各指毎に一つ、中指には2つ存在している

「次は右側を見てくらいいかね」

その声の通りに右側に手をやる、そこにも同じ御椀形だ

また蓋を開ける、そこにも先ほどと同じ手形だ

左側との大きな違いは、各種ボタン以外に掌の部分に丸い口口口動く物体が存在する事だ

それはさながらトラックボールマウス（マウスをひとつくり返したような感じ）のような

装置だった

中指のボタンも右側は一つしか存在していなかつた

「見ててくれたかね？」

アナウンスが入る

「そこに両の手の平を置いてくれないかね」

そういうわれアナウンスの声の通りに手の平を乗せる

ボタンは少し固く少し指に力を入れないと押せないようになっていた

「準備が出来たかね、各種操作説明に移るからついてきてくれたまえ」

「なあ、これは事前に録音されたものである、もう一度最初から聞
きたい場合はキーボーディのRを押してくれ」

「なんだ？ただの録音だったのか」と心の中で眩いた
今俺はアナウンスで流れた音声通りに事を進めている
手で力チカチスイッチを押して、動搖している心を静めている
それはさながら貧乏ゆすりのような仕草だ

暫くしてまたアナウンスが入る

先ほどのアナウンス一周分くらい待たされただろうか
「では次の説明に入る事にしようかね」

今までブルースクリーンだった画面が切り替り
先ほどのホール内の映像へと移り変わった

酷くうなだれている学生達が画面へと映し出されていた
友達を見つけて話し込んでいる奴もいる

慰めてもらっている学生の姿も見える
椅子に持たれて寝ている奴、さもざまだ

こんな映像を見せてどうするのだろうかと考えていた時

また少しして高島のアナウンスが流れる
「まず基本操作だ」

高島のアナウンス内容を要約するとこうなる

- 左手の操作 -
- 小指のボタン しゃがむ
- 薬指のボタン 左へ移動
- 中指のボタン 上の方前進 下の方後退（押し込む強さによって走り歩きと調節可能）
- 人差し指のボタン 右へ移動
- 親指のボタン ジャンプ

一通りアナウンスが終了してある事に気が付く
この操作方法、昨日俺がやっていたゲームの操作方法だ
いFPSだ、丶丶。

間違いな

この操作方法ならFPS初心者でもキーボードのボタンに迷ってと
いう事がない

キーボードを見る必要がないのだからあたりまえか
さらに初心者でも幾分直観的に操作できるはずなのだが
こんな操作方法でホールのあれば機敏に動いていたのかと思つた

おれも初心者の時はちらちらキーボード見て操作してたな
そのせいで顔をあげたら敵がいて、酷くやられた物だな
壊かしい思い出がよみがえる

アナウンスの終わり際

「基本操作に付け加えて言つよ、伏せる動作をしたい場合は小指の
ボタンを押した状態
で親指のボタンを押してくれたまえね」「
なるほど、そうやって匍匐状態になるのか
やがて高島の左手の操作説明が終わりを告げる
「次の説明に移る前にもう一度アナウンスを聞きたい場合はRをお
してくれたまえ
ね」

また一周分待たされるのかと思い、多少暇だった俺は資料に目を通
す事にした
資料の順序からして次は射撃設定に移るといつ事らしい
それ以外の事も色々と書かれていた

音声の設定やら
キーボードが設置されている理由など
まあ色々
仲間との通信方法なんかもこれに書かれていた

全部に目を通す事が出来なかつたにせよ

大体の事を把握する事が出来た

一周分くらいの間の後画面が切り替る

それと同時にアナウンス

「では射撃の説明に入るよ、いいかね」

正面のスクリーンに映し出された画面は射撃場で

縦一列にサイクロバスが並んでいるのがスクリーン上で見てとれる正面50メートル先には人を模つた紙のターゲットが一枚張り付けられていた

「右手の操作だ、君達の掌には今トラックボールがあるね
俺の手の平には確かに丸いボールがある

それを□□□□動かすと画面上の視点がグルグル回っている

「それを動かして見てくれるかね」

先ほどから弄くりまわしているトラックボール、これで射撃をすると思うと少しガッカリだつた

なんにせよトラックボールの操作はやり辛くてしじうがなかつたまあ馴れなのだろうけど、・・・。

「次は重要だから良く聞いていてくれたまえね、

今回は人指し指しか使わないとは思うが一応説明しておこうかね」

- 右手の操作 -

小指のボタン 仲間との連絡（音声連絡）作中内は無線で統一

薬指のボタン 各種グレネードの選択

中指のボタン 兵装固有の行動（スナイパー・ライフルの場合スコープといった感じ）

人差し指のボタン 射撃

親指のボタン 武器の切り替え

右手の操作説明を終えた高島のアナウンスが流れる
「それでは今からプロファイルを作成するよ、射撃の癖をサイクロ
プスにインプットするからね。正確に正面の標的（人の形をし
た紙）を打ち抜いてくれたまえ」

そういわれ、高島のアナウンスが終わつた
ビーフという合図と共に物凄い発砲音がスピーカーから四方八方流
れてきた

ダダダッ ダダダッ ダダダッ ダダダッ
ダダダッ ダダダッ ダダダッ ダダダッ

銃器の設定は3点バーストになっているようで、設定の変更ができ
なかつた

俺も恐る恐る人差し指のボタン（以後トリガー）を押してみる事に
した
ダダダッ

激しい発砲音と共に画面上の視点が激しくぶれる
トラックボールのせいでリコイルコントロールが激難しい為だと悟
つた

＝リコイルコントロール＝

マウスを操作して射撃中に玉を中央に集中させる為の技術
上級者になると一発も外さないで敵を倒す事ができる

暫くしてプロファイルは設定が終了した
サイクロプスの大演奏会はやがて終りを告げ
いよいよ試験本番である

今回はリピートがキャンセルされており、すぐさま試験開始になるらしい

やがて前方の画面上に映し出されたのは5メートル四方の長方形建
造物が立ち並ぶ

無骨なフィールドと

縦一列に立ち並ぶ5台のサイクロプスといわれるロボットの姿だった

これからやる事はゲームではない

先程の射撃場だつてそうだ

銃器は日本軍の第86式小銃を使つていたじゃないか
使われている弾はなんだ、あの威力、衝撃、実弾じゃないか
ゲームじゃ日本軍のマイナーな銃なんて起用されるわけがない
しかも銃器を使用していたのは何だ、ロボットだつたじゃないか
ロボットが正面の標的めがけて射撃だなんて
オレはあんな光景今まで見た事ない

目の前の出来事はスクリーンを通してだけど本当に起じつている出来事なんだ

うなだれる俺を尻目に高島のアナウンスが流れる
「プロファイルの作成は終了したよ、いよいよ適正試験本番だ覚悟して取り掛かってくれたまえね」

一拍の間の後高島が続ける

「試験内容の説明は彼の方が適任さね」

また一拍の間がとられ

先ほどの壇上にいたアメリカ軍人中将の威勢の良い声がコクピット内に響き渡る

「今回の試験はアメリカ陸軍特殊部隊との合同演習も兼ねて行われる諸君はレッドチーム、我々特殊部隊はブルーチームだ
ルールは至つてシンプル、諸君は我々の動かすブルーチームの演習用サイクロプスを倒せばそれで良い」

その音声はマーク・キス中将のものだつた

相変わらず耳を貫くような大きな声だ

少しの間を挟んでマークスがまた喋りはじめた

その声は少し譲歩気味の口調、声の大きさも先ほどよりは小さい
「諸君もいきなりプロとの戦闘では少し分が悪いだろ？

今回は誠に特別な事ではあるので、諸君には助つ人を1人自衛軍から付ける決まりとなつていて」

助つ人、通りでサイクロバスが5体もいるのか

先ほど運ばれた奴らと俺を含めても1体は余るからな

これで納得がいく

「ランカーは諸君の隊長となるので命令は絶対に聞くようだ
以上、任務内容を確認再度確認した場合はキーボードのCとRキー
ーとFを同時に押す事で確認できるようになつていて」

マークスのアナウンスも終盤へと近づいてきた頃だらう
緊張が頂点に達してきたみたいだ

俺はマークスの放送を聞く反面大きく深呼吸していた
手の平の汗からも汗が噴き出しているのがわかる
過度な緊張状態の影響で胃もキリキリと痛む

「試験開始は今から5分後、以上で、私からの説明を終わる
マークスの放送が終了した

やがて「ブツ」という音と共にコクピット内は静寂に包まれる
聞こえる音と言えば、自分の呼吸音
さらには心臓の音くらいなものだ

試験開始は5分後、俺は開始までの少ない空き時間を利用して試験
内容を確認する事にした

チャプター9・5「作戦内容」

試合内容はチームマッチ

ラウンド数は3ラウンド、先取戦ではないので3ラウンド終了時点
で試験終了となる

1ラウンドの制限時間は10分

勝利条件は制限時間内に敵を全滅させるか、終了後見方の人数が多い方を勝利とする

機体の耐久力は試験の為HPを100とし

敵側からの射撃ダメージは、腕及び足25胴体45頭部80となっ
ている

なおグレネードの類は敵味方なくダメージを与えるため、チームキ
ルを防止するといつ名目上隊長機以外は実装されていない

コクピット内には音声通信装置が存在する

通信装置を利用し仲間とのコミュニケーションを図つて
任務を遂行してくれ

レーダーは画面の左上に存在する
味方の位置と地形を把握するのに便利だ

仲間が戦闘でやられた場合は右上に表示されるようになっている
なお誰にやられたかの表示はされないので注意してほしい

今回は演習ステージを使用する
天井までの高さは20メートル

広さは半径100メートル

5メートル四方のキューブが乱雑に存在するのでそれを障害物として利用し戦闘を進めてくれ

“演習場で駆動するサイクロプスと実戦型との違い”

施設内に存在するサイクロプスには例外無く衛星からの電力供給がされないため

実戦型とは少し違った電力供給システムで駆動するようになつている実戦型が頭部に電力輸送するのに対して、演習型は背部に電力輸送先が存在する

衛星と演習用で電力の輸送方式が違うわけではない

これは、サイクロプス本体の中でも頭部が一番単価が高いので演習用だけでも単価をそぎ落とす措置として行われている物でアンテナの性能を演習用は大幅に落としているからである

チャプター10 「試験開始・第1ラウンド」

ビーーーー

つといひ甲高いビザー音と共に
サイクロプスが動くよつにある
トラックボールを動かすと視点が「ロロロロ」と動く
一通りの運動操作を確認する

その後あたりを見回すとそこには俺を取り巻くよつた

4台のサイクロプスの姿があつた

肩のところに先ほどのコクピットの型番が書いてある
TSC-302 304 それとTSC-000

隊長機は何所か第3演習場とは違ひ別の場所から操作しているのだ
ろづか

あの演習施設にTSC-000の型番を持つたコクピットは存在しなかつたはずだ

そんな事を考えていると連絡が入つてくる

「ほやつと立つてないでさつさと行くよーーー。」

その連絡戸と共に周囲を観察していたロボット達が一斉にTSC-000の方向を向いた

この音声連絡でわかる隊長は女性だ

女性が隊長という事で俺は少し不安になつたが

このまま突つ立つてるわけにもいかないので隊長へと連絡を返す

資料に書いてあつた通りに右小指のボタンを押す

音声通信はこのボタンを押している間有効になるらしい

俺はボタンを押して発言した

「どうやって攻めますか？」

その言葉をいう俺は半ばやけくそだつた

最前線送りだけはどうしても免れたいのだ

その思いだけがこの馬鹿げた戦争ゲームへの参加を表明させたのだ
他の3人も同じ気持ちである事を祈るばかりである

隊長機から通信が入る

「とりあえず付いて来て、ここに居たらやられちゃうからね」

「了解」

俺の他に1人から通信で合図が入る

その声は先ほど聞いた関西人風の男性の声だった

通信ナンバーTSC-304だ

その合図共に隊長機の後を追うよつとして一列になる形で4台のサイクロプスが移動を始めた

残念ながらTSC-302号機はそのまま動く事はなかつた
見たまんまだとラウンドリタイアという事になるが

エラーで動けないのかもしね

俺は一番最初にコクピットに押し込まれたので
誰が02号機を操縦しているのかはまったくといつていいほどわからぬ

俺は一番最初にコクピットに押し込まれたので
誰が02号機を操縦しているのかはまったくといつていいほどわからぬ

暫く進んで隊長機へと通信を入れる

「あのー、できれば敵の情報が欲しいんですけど、隊長わかります
？」

04号機も同じ事を考えていたらしい

「そうやね、アメリカの演習も兼ねとるつて言つてたんやから、武
装辺りは知りたい

？」

俺たちの間に答えるように隊長機から通信が入った

「「めんね、私軍隊に詳しくなくて。今これ動かしているのも臨

時だから

続くようにして04号機が答える

「なんや臨時なんか、臨時の隊長さん大丈夫なんか？」

隊長から通信が入る

「武装は多分こっちと大差ないと思ひけど、」

「武装が同じである事を祈るしかないですね」

確かにそうである、こちらの武装は自衛軍正規のライフル一本のみ演習と言っている以上米軍の武装がこちら側と同じとはほんがらないのだ

とはいって、レイブンが言っていたように隊長格以外がサブ武器を使えないとしたなら

多少は楽になる

今回隊長は臨時だといっていた

動き方からして、サイクロプスを動かすのに多少慣れているみたい

だけど

戦闘が始まるまではなんともいえない状況だ

「それにしてこのサイクロプスとやらのモチーフがFPSになつてゐるには驚きやな」

「そうですね、直観的に動かせるのは良いですね」

「おつ、俺以外にもFPSを知つたる奴がいる奴がいたとは会話に花が咲きそうになつた頃

隊長から通信が入つて来る

「私語はつつしみなさい」

シレッとした口調で隊長から連絡が入る

その言葉にすかさず04号機が突つ込みを入れる

「なんや聞こえとつたんか

「ええ、全部ね」

3人で会話をしながら50メートルくらいキューブの森を直進した時どううか

カツン カツン カツン

金属が固いものに当たる時の音に近いだろ
その音はとても低い位置から交互にリズム良く鳴っていた
まるで足音のように

その不穏な音を耳にして全員が足を止めた

「今の音なんですか？」

不穏な音の正体を確かめる為に通信をいれる

「多分敵の足音だと思うけど、リズムから歩いてるみたいね」

隊長機から通信が返ってきた

このステージ内は無音といつていいくらいほとんど音がしない
先ほどからする音といえば、味方機の走る足音くらいなものだつた
しかも足音はガシャ、ガシャとかなりの騒音を立てている
この距離で敵の足音が聞こえると言う事は
既に敵に位置を把握されているかもしね

「ねえ、ちょっと見てきてくれないかな？ 01号機君」

隊長が直接俺の機体を名指して通信を送ってきた

「嫌ですよ、敵のレベルもわからないんですよ？」

04号機が会話へと参加する

「そりや、じうじう時は隊長が体張るもんとちやうんか？」
「だつて、怖いじやない！ あつ、じうじう場合つてあれよね。隊
長命令つていうのかな？」

隊長の無茶な発言が宙を舞つた

その発言でも分かる、隊長は素人だ、・・・。

仕方なく隊長へと通信を入れた

「わかりました隊長命令ですね、今ちょっと見て来ますから」

渋々と隊長命令を受け入れた俺は
キューブとキューブの隙間から辺りを覗き込むよにして見回す事
にした

音の方角を確かめ、ジグザグに配置されたキューブを縫うよにして歩いて

物音のした方向へと進んで行く
2つくらいキューブを進んだ時だろうか

そつと覗き込むと

敵の青いサイクロプスを発見する事が出来た

俺はその事を伝えるために全体に少し叫ぶように通信を入れた
「敵です、発見しました！。 青いのが1機です」

隊長機から返答がくる

「わかつわ、すぐそつちへ行くから待つてて」

通信の連絡がブツンと切れた時だろうか

俺の後方からガシャン、ガシャンというサイクロプスの走る音が聞
こえた

あつ、あいつら走つてやがる、ヽヽ。

その音はとても勢いよく鳴り響いていた
そしてどんどん俺の方へ近づいて来る

しばらくして俺の後ろに到着したのだろう

「あつ、ちょっとどいて〜〜」

俺はその声がなる方向へ振り向いた

「へつ！〜！」

ドガシャーン

隊長が止まりきれずに俺へと激突してきた

その弾みで俺は隠れている場所から前方へと弾き飛ばされるよ

う

外へと放り出されて

しま
た

俺の正面には今敵が居る
放り出された衝撃で俺のサイクロプスは勢いよく転げる
そしてそんな間抜けな俺の姿は敵から丸見えだつた
サイクロプスも激しくバランスを崩しているらしく直に射撃体勢を
取れる状況ではなかつた

見るにM16のグレネードランチャー装備型だ
とても実践的である

脳裏に一瞬衝撃が走る「隊長機か！！」
驚きのあまり「クピット内で叫んだ時だ
力チツつというトリガー昔と共に
ポ――――ンつという奇怪な音が正面からした
煙を噴いて丸い物体が勢いよく飛んでくる
やがて丸い物体は俺を通り過ぎ

「左下に体力メーターがあるって資料書いてあつたっけなー」とブツブツ眩きながら下を見ると、その瞬間に辺り一面が激しい光源に包まれる。その光が収まつた頃、俺のサイクロプロスは機動をやめた。真後ろの壁に跳ね返ると地面に落ちた。

次に右上を見る

確かやられた奴が表示されるはずだつたよな

そのほかTSC-000,TSC-001,TSC-004と書かれていました

04号機から通信が入るいる

「どないしたつちゅーねん」

隊長機からも連絡がくる

「なんか動けないんだけど、 、 、 」

しばらく見方側は混乱していた

そして混乱が収まりかけた頃、 隊長達に通信を入れる

「敵の武器がライフルにグレネードを装備してるタイプでした」

「つまりどういう事？」

隊長から連絡が返ってきた

まったくもつて自体を飲み込めていない様子だ

0 4号機から通信に入る

「ああ、 グレネードランチャーか？」

0 4号機は軽く舌打ちをして続けた

「隊長機にでも鉢合わせたってことか～、 おたく運ないなー」

そう、 煙を噴いて飛んで来た物体はグレネードランチャーの弾だ

発光の仕方からして実際に爆発したわけではなく、 光源の照射面積

によつてダメージが

決まる仕組みらしい

それにもしても、 一気に3人を倒すほどの威力、 騒威である

俺達の会話に隊長が割り込んでくる

「ぐれね～どちらんぢや～つて何？」

隊長の発言はとてもめんどくさいものだつた

正直その隊長の質問に返答しようか迷つたものの
一応隊長なのだという事もあり連絡をする事にした

「遠投系の爆発物です」

初心者でも直観的にわかるように

俺の言葉に0 4号機も続ける

「手榴弾やな」

俺たちのこのやり取りで隊長は納得したみたいだ

それにも気になるのは0 2号機と0 3号機である

0 2号機は動かないから仕方ないとして

確か0 4号機の後ろをずっと0 3号機がついて来てたはずだが

先ほどから全然会話には参加して来なかつた少し気になる事があつたので

隊長機へと連絡を入れる事とした

「やられても、見方への通信つて出来るんですか?」

「うん、それは問題無いとは思うけど、、。」

隊長からの返答を元にトリガー・ボタンを押すさつきまで自分のサイクロバス主観映像だつた画面が

03号機の主観視点へと変更された

03号機はその場を一步も動いていない様子だつた

田の前の3体のサイクロバスを見て、呆然と立ちつくしている

03号機へと通信を入れる

「03号機さん聞こえますか?」

その声を聞いたのだろう、頭部がキヨロキヨロと動いた俺の画面の視点が左右に動くのが確認できた様子からして音源を捜しているみたいだ

無論音源は先ほどやられた連中なのだが

それ以上に自分を名指した通信に驚いている雰囲気だつた

04号機から通信が入る

「なんや聞こえているみたいやな、ちょい、視点を上下に動かしてくれるか?」

04号機の問い合わせに答えるように

視点が上下に動く、3回ぐらい往復しただろうか

やがて視点が元に戻つた

さらに04号機が続ける

「何でええ、喋つてみ」

今度は画面が左右に振れる

「無理なんか?」

03号機の視点が中央で止まつたと同時に隊長機から通信が入る

「ボケツと立つてないで、そこの影敵がいるから気をつけたね」
また視点が上下する

どうやらこれが分かつたという合図らしい
割つて入るように俺は連絡を入れる

「今そこに居る敵無視した方が良くないですかね？」

俺の中には少し府に落ちない事があった

それを03号機に確認してもらいたく

03号機へと通信を入れる

「正面を突破して敵軍のスタート地点までいつてみてくれないですか？」

少し、ヤケクソっぽく言った

そのヤケクソに反論するように隊長から激が飛ぶ

「そんな事したら無駄死にじやない！..え？、最後の1機まで無駄にやられに行けつ

ていうの？」

隊長の甲高い声コクピット内に響き渡り

女性特有の高音が耳の奥に残る

それを返すようにして04号機から通信に入る

「隊長はちょっと黙つとけ、今回やられたのだつて元わと言えばあんたのせいや。その非を責めない01号機君は大した奴っぢやで」
04号機にまで子供扱いされた、・・・。

その後内輪採めは1分近く続いたが

その間03号機はその場を動く事をせず、俺ら敗者の会話をじつと静観していた

内輪採めしている間も敵のカツン カツン とつ足音はしたけれども俺達の残骸を確認しようとはしてこなかつた
それでもわかる敵の様子が少し変だ

たぶんこの50メートルのラインにあるキューブが底辺なのだろう

それ以上の深い追いをしない作戦なのだと思つただが

1分の後隊長が納得し先ほどみたいに隊長命令をだすと、約束してくれた

3体のロボットの抜け殻の横には最後の兵員であるつ
03号機が今立っている

彼がやられればブルーチームの勝利となるだろつ

04号機が03号機へと質問した

「今体力どれくらい残つとるんや?」

やはり03号機からは返答がなかつた

「やつぱり無理なんか~」

今や03号機は引っ張り廻である、俺、隊長、04号機から質問攻めだ

だがそれらの質問に彼が答える事は無かつた

やがて隊長命令が入る

「いい、さつさ、01号機君が言つたみたいに中央突破で攻めるか

ら

その声を聞いたのだろう

また上下に視点が振れる、納得したつて事が

やがて3号機は敵がいた角とは別の通路を選び
ガシャン、ガシャンと音を立て突き進んでいく

途中キューブの隙間からM16を持った敵の姿が見えた

先程の奴とは違う型番だ、さらにライフルの先端にはグレネードが
換装されている

03号機の赤いサイクロプスを見るや銃器を構えるが、すぐさまキ
ューブの影に03号機が隠れた為に、構えを解くとまたカツン、カ
ツンという足音だけが響きわたつていた

俺はその光景を見るや、全員に通信を入れる

「やはり変です、敵側が攻めて来る気配がありません。しかも先ほどと同じ武器でしたよ」

04号機から通信が返つてくる

「ほんまかいな、全員隊長装備つて事かいな」

「なんとも言えないんですけど、そつなると思います」

俺達の会話中も直〇3号機は体長命令を忠実に守り、中央を直進していく

やがて80メートルほど前進した時だらうか、ようやくキューブの森が終わりを継げた

正面にはブルーチームのスタート地点が見えた

あたりを見回し恐る恐る正面へと出ようとする〇3号機

前に出ようとした〇3号機を静止させよとして俺は連絡を入れた

「ちょっと待つて！！」

他の人達が気がついたのかは分らない

俺はかすかに映る黒い獲物をいち早く発見して連絡を入れた

だが一瞬通信連絡が遅かったのだらう

既に森の中から広場へと歩を進めていた〇3号機も一歩遅れて敵を見つけたらしい

〇3号機の銃声が響きわたる

ダ - - - - - ン

だが銃声は一発だけしか鳴らなかつた

標準の場合なら3点のバーストショットの重く乾いた銃声が聞こえるはずなのだが

〇3号機の銃声は1発分しかならなかつた

それと時を同じくしてだらう、敵の方から重く甲高い銃声が鳴り響く
タ――――ンといふ甲高く重たい音だ

そして倒れ込む03号機

03号機のカメラはその正体をしつかり捕えていた
スタート地点の右隅で馬鹿でかい銃器を構える

青いサイクロプスを

形状からして見るにスナイパー・ライフルか！！

「クソキャンプかいな！！」

04号機から通信に入る

形状からしてオートマチックのスナイパー・ライフルだ

「なーに？あれ、ヽヽ。」

困惑する隊長に04号機が通信を入れる

「スナイパー やな」

俺も会話に参加する

「多分あれが隊長機ですよ！！」

「じゃあ敵の戦力つて、圧倒的じゃないか！！」

04号機やはり驚きの色を隠せない様子だった

「どういうこと？」

隊長機から連絡が来た

やはりまた自体を飲み込めていないらしい

「スナイパーのキャンパー程厄介な相手もいないんですよ、敵は追つてこなかつたんじゃないんです。多分俺達を中心におびき寄せて隊長機がそれを狩る、そういうフォーメーションだったんですよ」

俺は少し興奮気味に答えていたと思う

「気になる事つてそういう事だったの？」

隊長期から連絡が返つてくる

「スナイパー倒すんにわ同じくライフルが必要やな」

「そうですね、ライフル1本しかもバーストの制約付きじゃ武が悪すぎますよ」

隊長が話に割り込んで来る

「こんなに戦力差があるなんて聞いてないわよ」

混沌とした会話を割くように

ビーーーーーとこうづブザー音が辺りに鳴り響いた

ブザー音と共に今まで〇三号機の主觀だった画面が真っ暗になる
どうやら試験の第1ラウンドが終了したみたいだ

画面が真っ暗になつて直ぐにアナウンスが入る
マーキスの声だ

「次のラウンドは5分の休憩の後行われる、味方側との通信は生き
ているので各自作戦を練るもよし休むも良しだ」
その後低い高笑いと共にアナウンスが終了した

耳障りな高笑いに耳を貸す暇もなく、俺は先ほどの事を思い返して
いた
まさか演習も兼ねてているとは聞いていたけれど
ここまで戦力差があるとは、せめてグレネードでもあれば良いのに
俺はそんな事を考えながら深く椅子に寄りかかった
第2ラウンドはどうしたものか、・・・。

チャプター11 「惨敗・第2ラウンド」

最初のラウンドが終了してすぐの事

マーキスのアナウンスが入り、今5分間の休憩を取っている
その間俺のチームはと、

終始隊長と04号機パイロットの言い争いだ
誰のせいで負けたの、足手纏いだの

正直そんな言い争いなんか構つてる暇なんかない
もしかしたら、適正無とみなされて駐屯地に輸送されてもおかしく

ない状況

だつて言うのに、この人達はどうしてこんなにノンキなんだらつ、
。

2人の言い争いを割くように俺が発言する

「次どうやって攻めますか？」

隊長が続くように答えた

「あー、君決めても良いんじゃない？ 04号機君じゃ当てになら
ないし」

「賛成やな、隊長の意見じゃまた事故るだけやしな」と04号機が
被せるように発言する

本当にこの人達は協調性が無いんだから、。

俺はとりあえず、このまま休憩が終わるのを危惧して

作戦プランを全体へ提示した

「なら各自バラバラに攻めた方が良いんじゃないですかね、多少は
勝つ見込みがあると思うんですけど」

正直また激突されても困る

それに固まつて移動してまたグレネードの餌食になるのは御免だ

暫くして俺のプランについての感想が2人から返ってきた

「そりやな、一人でやらせてもらひわ」

「えー、一人でやるの？」

意見が分かれたが、隊長のわがままにはお構い無と言つた具合に通信を入れる

「決まりですね」

「決まりやな」

俺達がプランを決定をした後も隊長が終始喚いていた
その喚きに耐えかねて俺が隊長へと通信を入れる

「付いて来るのは勝手ですけど激突はしないでくださいね」

「わかつてゐるわよ」

その発言を最後に無音の時間が続いた

03号機も喋れるのなら

もつと色々作戦が練れたのだろうけど

休憩時間の終了間際

真つ暗だった画面がスタート地点の映像を映し出した
その映像を見て04号機から通信が入る

「おー、戻つとるやんけ」

世界の最新技術を見て04号機がはしゃいでいる

「このシステム作るのにどれだけ労力使つたと思つてゐるのよ」

隊長機から無線が入つてくる

先ほどやられた場面からTSC達がレッドチームのスタート地点に
並んでいるのだ

型番が同じという事はTSCは先ほどと変わらず同じ機体だ

そして今彼らは1ラウンド目が開始した時と同じ映像を映し出して
いる

こんな技術力が世界にあつたのとは

心の奥底で少し感心していた

そよりも隊長について気になる事が出来たので通信を入れる

「隊長つて開発者が何かだつた」

俺の発言は無残にもビーという試合開始を告げるブザー音に引き裂かれた

そして甲高いブザー音が全員のコクピット内に響き渡る

適正試験、第2ラウンドの開始だ

四号機から連絡が入る

「それじゃー、オレは左隅から攻めてくるわ。付いて来たいやつが居たら勝手に付いてきーやー

卷之三

それに続くよひに○○三号機も左の隅へと移動する

「了解。俺は右隅から攻めるよ」

その言ふことを終ると俺は右隅のギリースへと歩を進めた

調度良い機会なので先ほどの質問をもう一度する事にした

「隊長つて開発者か何かだつたんですか？」

北漢書卷之三

「うん、そうだよ。」この運営責任者の助手をしてるんだから

「はい、お手伝いします。お手洗いのドアも

「そりなんですか、凄い兵器を作ったもんですね」

姫咲一郎、元陸長、近畿をノホウ、元の意見一覧、二〇二〇一四號幾

俺の意見に続くように04号機からも連絡が入る

「やうや、そうや、こんな変な実験に無理矢理参加させやがつてからにー、オレの内定かえせや！！」

「じめんね、最初はこんな事の為に使いたくなかったんだけどね」
04号機パイロットの激しい口調に負けたかのように急に隊長の声のトーンが下がつた

先ほど自身は何所へいつてしまつたのだろうか

04号機から無線が入る

「そんのは、どうだつてええねん。問題は結果や結果、結果こんな事に使われとつたら無意味つちゅう話やねん」

確かに04号機の意見にも一理ある

さらに04号機が続けようとした時だ

04号機の音声から銃声らしき音が聞こえて来た

ダダダッ ダダダ という自衛軍のライフル音と
タタッ タタッ タタ というM16の射撃音だ

どうやら敵側は射撃制度を上げるためにバーストを解除してゐた
いだ

こつち側の射撃が当たらないと思われてゐるのだろうか
交戦中と思われる左側へ通信を入れる

「今は隊長を責めるのは止めた方が良いみたいですね」

軽い舌打ちの後04号機からの無線連絡が止んだ

隊長からの連絡もそれ以降無かつたので、ロボットの足音だけが不
気味にスピーカーから木魂してゐた

右のキュー^ブを進んで45メートルくらいだろうか
カツン カツン

というサイクロプスの足音が聞こえたので移動を止める
どうやら敵さんは先ほどと同じ場所にいるみたいだ
隊長に連絡を入れる

「この先、敵が居るので気を付けてください
「わかつたわ」

隊長は一言さみしげなく口調で言つた
さつきの〇四号機に言われた事が応えているのだろう

やがて俺はキューブの角から通路へと出ると
そこには青いサイクロプスが銃器を構えていた
まるで俺たちが出てくるのを待つて居たみたいだ

また先ほどのグレーネードランチャーを構えている、あれで俺達を
一斉に焼くつもりなのだろうか

武器を構える仕草を見て一気に敵の方へ走り出す
今度はグレネードを使われないように一気に間合いを詰めたのだと
それに焦つたのだろう、大慌てで、グレネードからライフルへと武器を切り替える敵機

しめたと思い、俺は射撃体勢へと入る

走りながら撃つた所で何処に弾が飛ぶとも分からぬからだ
サイクロプスの移動を止め、少ししゃがんでライフルを構える

俺に少し遅れて後ろの通路へと出てきた隊長機の援護射撃が入る

ダダダツ ダダダツ ダダダツ

ろくにリコイルもしない隊長の射撃は敵の上空のはるか上を撃ち続
けていた

それに続くように俺もよつやく射撃を開始する

ダダダツ ダダダツ

トラックボールでの射撃はやはり難しい

それに加えて3点バーストだ

6発撃つて敵の腕と足に1発ずつしか当たらなかつた

ようやく敵機も射撃体勢を整えたのだろう、敵の射撃が始まつた

タタツ タタツ

頭部への正確な射撃が2発入る
その2発で沈められてしまう俺の機体
更に、その後の2発で隊長のサイクロプスを一閃した
暫くして右隅の画面に俺達の名前が表示された

それと同時に04号機から連絡が入る

「お帰り~」

どうやら先ほどの銃撃戦で左側を攻めてた連中は既にやられていたらしく

集中していて全く気がつかなかつた

隊長に連絡を入れる

「隊長、これ動かすの始めてでしょ?」

俺の唐突な質問に隊長が反論をする

「そんな事ないわよ、さつきだつてホールで動かしてたんだから!」

「!」

隊長の話だとこつなる

先ほどのホール内でサイクロプスのデモ機を動かしていたのが隊長なのだと

空高くジャンプして1回転し、かつて良く着地したのが隊長なのだと
04号機も同じ事を考えていたらしく疑問の声があがつた

「あれ隊長やつたんか、偉いかつこ良く決とつたな~、ああ言う動
き俺らもできへん

のか?」

04号機の言う通りだつた

1ラウンドが始まつて動作確認をしていた時だ
少しジャンプをして遊んでいたのだが

せいぜい2メートルくらいしかジャンプできなかつた
それに比べてホール内のサイクロプスは凄かつた

上空を一回転それも3メートルという常人離れしたジャンプをしていた

そんな事を考えていた時

隊長から通信が入る

「ああ、あれね。あの時はプログラムで動かしていただけたんだよ」

俺は隊長へと返答した

「この機体も、プログラムで動かす事ってできるんですか？」

一拍の間を挟んで隊長が答える

「ええ、勿論」

隊長の言葉はとても活き活きとしており
さつきまでの沈んだ声とはまるで別人の声に思えた

隊長の発言を最後にブザー音が鳴り響く

2ラウンド目終了のお知らせだ

やがてレイブンのアナウンスが入り

先ほどのように5分間の休憩が取られた

休憩中俺たちは特殊プログラムを使った作戦を練ることにした

勿論参加したのは3人だったのだが

3人の会話にももう慣れていた

チャプター12・1「特殊コマンド説明* 反撃の序曲・第3ラウンド開始直後

“サイクロプス特殊コマンドの説明”

サイクロプスには特殊コマンドが存在する

この特殊コマンドは状況に応じて色々と組み合わせる事が可能でシステム面に預めインプットしておけば、コマンドを入力する事で使用可能だ

なおコマンドはキーボードで入力する

たとえば、本来のTSCのジャンプ力だが2メートルとなっているこれはTSCの限界値ではなくリミッターを掛けている為にこの数値となっている

これにリミッター解除プログラム

～ハイジャンプ～を入力する

まず初めにキー ボードの`Ctrl`を押した状態で`H`を押し

その後`Enter`押す事で事前入力が完了となる

この状態でジャンプボタン（左親指のボタン）を押す事で3メートル弱まで

ジャンプ力が上昇する

～前方宙返り～

`Ctrl+R` `Enter` ジャンプボタン

TSCがホールでやつた特殊ジャンプ

その他に様々な特殊コマンドが存在し
人間をベースとした行動はすべて使用可能だ

近接戦闘による行動としてジャンプ蹴り 上段回し蹴り 正拳突きなど

パワーケートとして ガツツポーズ 挫折（オーン）など

なお特殊コマンドは一度使用すると再度入力をしなければ同じ行動でも使用する事が出来ないようになっている。

＝反撃の序曲＝

隊長は一通り説明を終えた後「で、どうするの」と言つた感じだった
俺は隊長へと質問する

「このキューブの上に登れないかな～？」

隊長から連絡が返つて来る

「流石にきついかな～。でも無理じゃないかもしねない」
そう言い終えると、隊長はブツブツ考えこんでしまった

隊長は無線を切るのも忘れていたため

全員のコクピット内には小声の独り言が響き渡つていた

「ん～でもあれか～、Rコマンドを使つたら壁に激突するし

「うーん、Hコマンドだけじゃ届かないしな～、、、、、、、、、、、

3分くらいそんな独り言が続いたのうか

やがて応えが出たみたいだ

隊長は俺達に「うん、やつてみようね」と一言いい終えるとまた黙

りこんでしまった

こつちの足手まといが一気に頼みの綱へと早代わりである

やがて視界が暗闇からスタート地点の映像へと切り替り

ブザー音が鳴る

ブザーが鳴り終えて

最終ラウンドが開始された

試験のクリアラインがどれくらいかはわからない

正直敵の兵装が違いすぎるので、ぐっと低いのかも知れない

そんな事を今考えた処で意味は無いのだろうけど

やはり気になつてしまつのは確か話だ

試験開始直後痛かつた胃も今は痛くない

手の平の汗も大分落ち着いた

敵が目の前に来たつて今の俺なら驚きはしないだろう

こうなつた以上最後まで戦つてやる

最終ラウンド開始直後隊長から通信が入る

「それじゃ一やつてみよつか、03号機君こいつち来て

隊長に言われるがまま03号機が動きだす

正面のキューーブへと隊長に誘導されて

キューーブと向かい合つようにして止まる

03号機の位置を確認して隊長から通信が入る

「c t r」を押してTを押してから前進

隊長の元気の良い声が響き渡る

響き渡る声に命令されて首を上下に振ると

やがて03号機はキューーブに背を向ける状態で密着し

ピタッと止まつた

「今度はc t r」を押してKで前進して

隊長に言われる通りコマンドを入力したのだろう

03号機がしゃがみ片膝の姿勢で止まる

「みんな、03号機君の上に乗るからね」

隊長が言うには03号機を踏み台にするとの事らしい

隊長が通信を終えると隊長機が03号機へと進んでいった

やがて隊長のTSCは03号機の肩に登るとバランスよく直立した

隊長機から通信が入る

「少し前進して」

そういうと03号機は左手中指を少し押したのだろう

さっきまでの方膝のポーズから直立姿勢をとり

3メートルを軽く超える巨人の出来上がりである

また隊長から通信が入る

「それじゃーいっくよ~」

少して抜けた掛け声と共に

隊長のサイクロプスは俺の頭上6メートルの高さまでジャンプした
クシャツと崩れ落ちる03号機を尻目に

隊長機が優雅な空中浮遊を終えキューブの天辺へと華麗に着地した
その着地の後、隊長機が小さくガツツポーズをしたのが見えた

俺はそれを見て「あんな事もできるのかと」小さく呟いた

見とれる俺たちを見上げるようにして立ち上がった隊長機から無線
が入る

「どんどん来てね~、ぼさつと立つてるとやられちゃうわよ」

一番最初もさつきだつて、やられたのはあんたのせいだ!…と思つた

04号機の無線が入る

「俺も頼むわー」

03号機がそれに応え、また先ほどの作業を開始した

04号機の機体が空中へと舞う

キューブの天辺へと華麗に着地する

俺もそれに続くよろにして、キューブの天辺へと
2人を追い駆けるようにジャンプした

その間03号機は大忙しである

04号機を送った後俺を空中へと持ち上げた

03号機は何度もクシャツと潰れながらも、俺たちの作戦に参加してくれたのだ

そのおかげで、今3機はスタート地点正面のキューブの上に登つ正在

やがて落ち着いた所で隊長から無線が入る

「登れたのは良いけど、この後どうしよつか、、。」

唖然とする隊長を見かねて04号機から通信が入る

「敵の頭上にあるんや、このまま狙撃したらええやないか」

俺が04号機に続くよろに通信を入れる

「ええそうですとも。敵が軍隊だつていうのならこち側はゲリラ戦で挑むまでです！」

そういうと俺はまだ1発も撃つていらないライフルのマガジンを無意味に入れ替えた

ガシャンッといつ音と共にマガジンが地面へと落ちた

チャプター12・2「反撃開始・第3ラウンド」

「ええ、そうですねとも、敵が軍隊ならこいつはグリラ戦で挑むまでです」

奴らはたぶんあの陣形をくずさないだろう

それが軍隊ともなれば尚更だ

最初にランチャヤーを撃つてきたサイクロプスがそうである

目の前に何体のロボットの残骸があつが

それは彼らの気にする所じゃない

自分の陣地内に敵が入ってきた、だから攻撃した

奴からしてみればただそれだけの事なのだ

詰まる所、ラウンド毎に02号機がやられないのも

そんな彼らの理念が原因なのではないだろうか

隊長機から連絡が入ってきた

「前に進めばいいのかな?」

「ええ、お願いします。一番最初にやられた地獄のキューブまで移動しましょう」

俺が隊長機へと通信を返すと、隊長機が動きはじめた

キューブの上で少し助走をつけてジャンプする

空中2メートル、キューブの上なので7メートルの高さを隊長機が飛んでいく

人間では考えられない高さを前のキューブへとジャンプしていくやがてキューブを渡りきった隊長機から連絡が入った

「どんどん、付いて来てね~」

隊長の通信が終わると共に

俺たちは次々に前へと進んで行く

俺が隊長機の後ろに続くようになんぱし

04号機が俺の後ろを付いてくる

04号機がジャンプする直前、03号機へと通信入れた

「03号機さんもついてきてな～」

キューブの下で待機していた03号機の頭部が上下に振れる

それを確認したのだろう04号機が俺達が待機しているのキューブへとジャンプした

ピョーン ガシャーン

見事に着地

5メートル四方のキューブ

通路の幅は約2メートル

サイクロプスのジャンプ力なら余裕でお釣りが返つて来るレベルの跳躍である

さらに先ほどみたいにキューブの森を進突き進んでいくよりもこのキューブの上をジャンプして行く方がはるかにスピードがあり40メートル進むのにも数十秒しか時間がかからなかつたやがて敵の頭上を発見した隊長から通信が入つてくる

「01号機君、敵が居たよ！」

慌てて連絡を返す

「触らないでくださいね。気がつかれないように待機していくください」

04号機も会話へと参加する

「そうやな、またへまされても困るわ！」

隊長は少しスネた素振りをしてその場で待機した

やがて隊長に追いついた俺たちは

微かだが、キューブの隙間から見える敵TSCの頭部を確認した

距離からして15メートルそこそこ

銃器で慎重に狙えれば、ほぼ確実に狙える距離だつた

「どないする、いてまうか？」

04号機が敵に照準を合わせた状態で通信を入れる

そんな彼へ俺は静止するよう促した

「いや待ってください、まだ微かに見えている頭じゃ確實じゃないですよ」

確かに今の状態では不十分だ

第2ラウンド、目の前のTSCに頭を2発、それで俺達はやられてしまった

今回この状況で先制攻撃を外した場合、今度はまた先ほどみたいに一掃されてしまう可能性が高い

そんな事を考えていた時、俺たちの後を追う03号機が目に入った
調度俺たちの真下のキューブで待機していた彼は何かの指示を待つ
ている様子だった

俺はそんな03号機を見て通信を入れる

「彼、使えないですかね？」

「彼つてーと03号機か～」

通信中も終始敵の位置を把握する、そんな時だ、頭の奥で閃きが走
つた

「03号機さん敵の後ろに回りこみましょっか

「なるほど、陽動作戦か！」

こちら側からは敵の位置が簡単い把握できるのだから

03号機に指示を出して敵の背後に周り込ませる事も簡単にできる
のだ

俺達の通信に答えるよしおの03号機の頭部が上下に揺れるのが確認
できた
どうやら陽動作戦に参加してくれるという事らしい

俺は既に作戦内容を話した後実行に移した

04号機が指示を出す

「03号機さん、そこのキューブの角を左に進んでから次の角を右

や

03号機が慎重に動き出す

隊長の時とは大違いだ！！

とは言え慎重な動きから、不安が見て取れた

彼のソロソロとした動き、若干の足音はすれども
物凄い音を立てて走りだす事はしなかった
やがてキューブを挟んで敵と横に体直線状に並んだ時だらうか
敵が03号機の足音に気がついたらしい
カノン、カノンという音を頼りに徐々に動き始めた

03号機がいる通路へと敵が迫つていく
だが、それもすべて作戦の内、計算された事なのだ
今まで正面を向いていた敵が、他の通路を見に行く為に俺たちから
背を向けたのだ
やがて徐々に進んで行く敵のTSC、徐々に敵を狙える範囲が増え
て行く

そんな敵のTSCを見て隊長から通信が入つてくる
「今チャンスなんじゃない?」

確かに絶好のチャンスだ

先ほどまでは微かにしか見えなかつた頭部が今は
肩まではつきりと確認できる

やがて肩だけだつたのが背中をも確認する事ができたのだ
「やりますか」

その合図を待つていたかのように04号機が銃器を構える
04号機につられる様に隊長も銃器を構えていた

最後に俺の射撃音と共に9発の弾丸が敵を貫いた

ダダダツ ダダダツ ダダダツ

撃ち抜かれた衝撃で敵がクシャつと倒れ込む

倒れこむ敵を見て隊長が小さくガツツポーズをした

「やつたね、01号機君」

9発打ち込んでいたものの、3人合わせて命中したのはたったの3発だった

その中でも一発頭部に命中したのが大きかったらしい

射撃には参加していた隊長も結局の所、天井を撃っていたのだからもし、倒し切れなかつた時は隊長を突き落として逃げる覚悟だつた。

俺は敵を倒して浮かれている隊長へと通信を入れた

「隊長ガツツポーズつてどうやるんですか」

「コマンド（Command）Gの後に左小指のボタンだよ

隊長の通信内容通りコマンドを入力すると、俺のTSCはキューブの上でガツツポーズをした

さらに続くように04号機も隊長のマネをする

やがて03号機が俺達が居るキューブへと戻つてきた

これで人数だけでも数が揃つたのだ

みんなに通信を入れる

「次は左隅に居る敵兵ですね」

今現在倒した敵は初回俺達をランチャーで一掃し

さらには2ラウンド目に2人を4発の弾丸で静めた名手だ

皆が同じ兵装をしていたのなら、やはり彼がブルーチームの隊長だったのだろう

肩のTSCの番号で分かる、多分中身は変わっていないはずだ

04号機から連絡が入る

「やつと一人や〜、マジきついわ」

俺が溜め息を付く間もなく、隊長が動き出す

ピヨーン ガシャーン ピヨーン ガシャーン
やがて先を進んでいた隊長が、また敵を発見したらしい
隊長から通信が入る

「01号機君、敵いたよ~」

「隊長タフですね~、こつちはもうヘトヘトですよ~」

「こついつ時、女が一番タフなんだから」

隊長はいつもと変わらない口調で返事を返した

やがて隊長に追い付いた俺達も敵の兵士を確認したのだが
少し様子がおかしい、先ほどの敵機と同じように待機はしてくれない
様子だ

もしかしたらジャンプの着地音を聞かれたのかもしれない
敵兵が俺達のいる方向へと移動してくる

04号機から通信が入る

「それにしてもこのまま角曲がつたら03号機と鉢合戦やないか
？」

俺はその通信を聞くと03号機の方向を見た
確かにそうだ

03号機はキューブの森を移動しなきやいけないため俺達よりも移
動速度が遅い

そして今居るのは俺達の真下の通路
曲がり角ばかり異様に存在する一本道だ

俺は慌てて03号機へと通信を居れた

「03号機さん、そつちに敵が来ています何所か他の通路に隠れて
ください」

俺のあわてる口調の通信が03号機に届いたのだろう
03号機の頭部が左右に動ぐのを確認する事が出来た
何所か隠れるための通路を探しているのだろう
キヨロキヨロと見回している

呑気に通路を探す03号機へ向けて04号機からも通信が入った
「はよ隠れなんか！」

〇3号機の画面から敵機が見えたのだろう、その微かな胴体を見て〇3号機は硬直した

の三号機はそんな隊長の叫び声は驚いたのか三号機はそのまま進んでいた方向から間逆へと方向転換する

した

その足音を聞いて敵の兵士が一本道へと一気に姿を現すと
03号機を追うようにして敵の足音が大きくなり更に勢いを増して

敵と〇三〇機との距離は三〇メートルくらいあるだろ？

俺と敵との距離はキューブ2つ分、約15メートルと言つた所か見る見る距離が縮まつていい、

通信を出している暇なんか全くと言つて良いほどなかつた

既に俺の体は答えを出していたのだろう、思ひよりも早く俺は行動を起していた

敵のサイクロプスは急に目の前に出てきた障害物に勢い良くぶつかり
障害物に弾き飛ばされて進行方向とは間逆の方向に勢い良く倒れこむ

キューブから飛び降りた為に俺の目の前には敵がいる

そして俺も敵と同じ格好をしているのだろう

練習場の天井をTSCが眺めていたために、天井に設置されている
照明が良く見えた

飛び降りた分俺の方が起き上がるのに少し時間がかかるか
TSCが起き上がるのを待つていると

俺の頭上にいる〇4号機が無残に倒れ込んでいる敵へと射撃を入れた

ダダダツ ダダダツ ダダダツ

その援護射撃のおかげで倒れこんだ姿勢のまま敵は動かなくなつた
倒れ込む俺を心配そうに〇3号機が見守つている
やがて俺のTSCが起き上ると安心したのだろう〇3号機が俺の
元へと戻ってきた

本来なら大丈夫ですかの一言でも欲しい所である

そんな事を考えていると〇3号機はまたキューブの天辺へと俺を持ち上げてくれた

全くもつて親切な奴である

〇4号機から連絡が入る

「お手柄やつたな」

「お帰り～、大丈夫だつたみたいね」

俺も皆へと返事を返す

「ええ、なんとか生きています、・・・。」

内心ハラハラ、ドキドキ物だ、もし援護射撃が入らなかつたなら俺は多分そのままリタイアしていただはずなのだから、それよりも問題はこれから

ここまで倒した敵は2体、残りは敵の隊長も含めて3体これからが正念場だな

チャプター12・3「反撃終了・第3ラウンド」

キュー^ブの天辺に登つて早々04号機から通信が入る

「お手柄やつたな」

「お帰り～、大丈夫だったみたいね、、。」

「ええ、なんとか生きてますよ。04号機さんの援護がなかつたら今頃やられてました」

俺の無事を確認して隊長がまた動きだす

ピヨーン ガシャーン ピヨーン ガシャーン

「あの人戦闘は苦手なわりに、移動ははやいんやから」

半ば呆れる調子で04号機が答えた

確かに、移動だけは早い

次の敵が何処にいるか分かっているのだろうか

ああ、もう25メートルも進んでいる、、。

25メートル先では隊長が辺りを見回していた

先ほど同様、敵を探しているみたいだ

今の状況、頭数なら現在こちらの方が有利だが、少し疑問が残る

先ほど俺は03号機を助ける為に上空から降り注ぐように落ちていつた

敵にぶつかって空を見るように仰向けの姿勢で倒れこんだ

それを04号機が射撃したにせよ、俺たちがキュー^ブの上に登つている情報が少なからず流れているはずだ

俺は大慌てで隊長へと通信を入れる

「隊長、俺達がキュー¹ブの上に登つてゐるって事敵にばれてるかもしれません」

「えつ！ 何で？」

隊長から気の抜けた返事が返ってきた
そして通信の終わり際だらうか隊長の歯切れの悪い悲鳴と共に敵の
ライフルの射撃音がなつた

音に気が付き俺達の前方にいる隊長を見る、どうやら隊長機は無事なようだ

すぐさま、キューブ中央へ引っ込んだので直撃はしなかつたらしい暫くして、04号機が隊長と同じキューブへとたどりついたそして俺も04号機に続くように正面にあるキューブへジャンプしよつとした瞬間

カチツ
ポ――――――ン

グレネードランチャーの発射音だ！！

やがて上空に煙を噴いた丸い物体が姿をあらわし、俺達のはるか上空を過ぎ去つていった

まばゆい光と共に、消失した
俺はと書つが、煙を吹く丸い物本こ驚き

足を踏み外して、また地面で横になつてゐる

ああ まだ地面を見る羽目はなるなんて」
「二核を頑張ら危は、用今のは」
「バ 元モ

待つていた

それに、してもタフな機械だ

人工筋肉を使つてゐるつて言つてたつけ

5メートルの高さから一度も落ちたのに体力は減らないし（画面左下のゲージ）

ぶつ壊れないし、ロボット工学も進歩したものだな

ＴＳＣに関心している俺を尻田にまた奇怪な音が直ぐそばなつた

カチツ ポ――――――ン

2発目のグレネードランチャー!!

どうやら敵さんば、キューブ上に居る隊長達へ射撃が届かないものだから

嫌気がさして、グレネードで一掃しようとしたらしい

て行く

そして流されて行くグレネード弾は何所から撃つて いるのか俺の視

音の鳴つた場所で敵の居る位置も把握できる

多分俺の居る所の、左隅のキューブにある通路で敵機は上空を見上
げ二つうちつぶらう

やがて俺の居る所に〇三号機が到着した

足を踏み外して地面に落下する所を見ていたのだろうか

03号機が合流した事を確認して隊長達へと

すぐさま〇4号機から通信が返つて来る

「アーヴィングの隠ひ居たと頃つかれ」

「ちょっと行つてきます、そこでジャンプでもして敵を引き付けて

「おこひぐだわ」、足踏みでもかまこませんー。
「せやなー、ジャンプしどつた方がおちよぐつる田にみえぬわー」

「えつ！？敵さんを挑発しちゃうの」

暫く考え込む間があつただろうか

やがて隊長達が、キューブの天辺でジャンプし始めた

ドカ ドカという凄い音が敵の恐怖を誘つ

急いで〇三号機へと通信を入れる

「〇三号機さん、そこの隅にいる敵を倒しますついて来てください」

俺は連絡を終えると既に走りだしていた

敵は今よほど混乱しているだろう

むしろ混乱していくくれないと困る

敵側も少しは固まつて動いていたのなら、こんな状況にも対応できただのだろうけど

動き出した俺につられて〇三号機が俺の後をついてくる

左隅にあるキューブの通路へ飛び出した時

敵の青いサイクロプスは上空に向けて銃器を構えていた

俺達に気がついたのだろう、大慌てで地上組に照準を合わせようと

する

だがもう既に遅かった

ダダダツ ダダダツ ダダダツ
ダダダツ ダダダツ

弾丸の波は敵が銃器を構えるよりも一瞬早く通過し
やがて、敵のサイクロプスは地面へと倒れこむと、そこで動ぐのを
やめた

ここまで3体倒すのに4分

このままいけば俺達の勝ちなのだろうか
かなりの労力を使った感じがした

自分が動かしているのは指だけなのに、この疲労感はなんのだろう

うか

そんな俺を尻目に隊長がまた動き出す
キュー^ブの上なら幾分安全だと思つたのだろう
ピヨーン ガシヤーン ピヨーン ガシヤーン

次は右側へと隊長が移動して行く
やはり隊長の移動は早い

隊長は俺達を置き去りにしてこち早く右隅のキュー^ブへと移動して
いた

そして地上を見回すそぶりをしたのち
隊長から通信が入る

「なんか敵さんやられちゃつてるみたいだよ？」

俺は少しばかりの混乱を見せる隊長へと直ぐさま連絡を返した
「やられてるつてどう言つ事ですか？」

「敵さんが、動いてないの、倒れこんでるつていつのかな～？」

気になつた地上組みも敵の残骸を確認しに行く
ガシャン、ガシャンと大きな音を立てながら03号機と残骸まで競
争である

やがて隊長に言われた地点にとつけやくすると

そこには確かに壁に寄りかかって倒れ込む敵の青いT-5Cの姿があ
つた

「誰がやつたんだろう？」

04号機も隊長と同じキュー^ブへと到着する

「ほんにな～、敵さんの無残な姿や～」

敵残骸を見詰めながら辺りを見回すと、敵の背中の下あたりに
白銀の丸い物体を確認する事ができた

俺はしばらく丸い物体を見つめていた
そして見つめながら通信を入れる

「これって、ランチャー弾じゃないですかね？」

「なるほど、ＴＫちゅう事か」

その発言にて〇三号機と隊長は面を食らつてゐる様子だった
確認するよりつに連絡を入れる

「チームキルですよ、簡単に言つと仲間割れです」

俺の発言で隊長も先ほどの出来事を思い出したらしく
通信が入つて来る

「ああ、あの煙を噴いて飛んでいたやつね」

〇三号機は相変わらず頭部を上下に振つていた

キューブの上から攻めてくるとは思つていなかつたのだろう
敵は、慌てて頭上にいる敵に照準を合わせる羽目になつたため
冷静さを欠いたのだ

見方が左隅から撃つたランチャー弾は隊長達のはるか上空を飛んで
行き

右隅に居る見方へと飛んで行つた

そこでやがて発光したランチャー弾は見事に見方を包み込む
不意に飛んで来た見方の一撃を回避する暇もなかつた敵機は今無残
な残骸となつてゐる

「グレネードでチームキルつて！ どんだけリアルに作られどんね
ん！！」

「えつへん、凄いでしょ！」

〇四号機がすぐさま天狗になる隊長へと突つ込みを入れた

「えばんなや！..」

俺はそんな2人の姿を見て少し気が抜けていた

既に敵を4体倒した

残るは敵の隊長機だけで、ここからが問題だ

やがて気を引き締め直した俺は皆へと通信を入れる

「あとは敵の隊長機だけです、スナイパーライフルを持っているので気を付けてください」

「厄介な奴が結局残つたんやな」

04号機はさらに続けた

「ちょっと確認してくるわ」

そう言つと04号機はすぐさま動きだした

いつもなら隊長が先に動くのだけど

今は銀色の弾をまだ見ているようだつた

自分達が作った物に見とれているのだろうか

「あつ、ちょっと待つて！」

俺の静止にお構いなく04号機は進んで行く

やがてブルーチームのスタート地点正面のキュークーブへと04号機が

たどりついた

そして、そんな04号機を追つよつとして俺達も移動する

「おひでー、敵さんの大将やー！」

下を見回して敵リーダーの姿を確認したのだろう

04号機から通信が入ってきた

そして通信と同時にスナイパーライフルの乾いた重たい銃声が鳴る

！！

タア - - - - - - - - - - - - - - - - - -

その銃声は第1ラウンド田で03号機を一瞬で沈めた音だ

敵リーダーのスナイパーライフルが火を噴いたのだろう

やがて画面の右隅に04号機がやられたという連絡表示が出現した
その表示と音に気が付き隊長機がやつと動き始めた
それと同時に04号機から通信が入る

「ぬあ――――、どくそが――――ああああつ――」

なり興奮気味の叫びだ

耳元では04号機の悲鳴が今もなお続いていた
「どうした？ 可があつたんじ

「敵のライフル」をうてたんす」とさじかで何があるかた

魔の「ハーバーはヤラれた人ヤ」

03号機が俺の脇を通過した

多分、ポジションを捕らえたのだろう。

キューブの隙間を移動していく

03号機の画面を見て、いたのだろう

03号機もそれに気が付き足を止めたがすでに時すでに遅しかつた
向こう側は一瞬写りこんだ影めがけてスナイパー・ライフルを一撃

重たく乾いた弾丸の銃声がまた一発耳元を通過していく

敵のリーダーはかなりの名手なのだろうか
微かに見えただけの03号機の胴体を射抜いたのだ
全く外す気配を見せない

それでいてかなりこの囲まれた状況に全く動じていな

危険を感じ俺はすぐさま後退しようとした時

その一時敵のリーダーの影が一瞬[『フーハー

「ああ、終わった」

俺は狭い空間の中で小さく眩いた

やがて隊長の画面に俺達の機体番号が表示されただろう
一瞬で3機倒され、気がつけば隊長は最後の兵員になっていた
隊長に通信を入れる

「逃げてください、敵はかなりの強敵です」

沈みきつた声で隊長に通信を入れる

「どうしたの？ 一体何があつたの！？」

気がつけば3機やられたこの状況で隊長は混乱していた
キューブの上であたふたしている様子だ

そんな隊長はとすると、ブルーチーム右正面2つ奥のキューブに居る

そこで危険を感じ止まっているのだ

たぶん女の感という奴なのだろう

そこから一步も動こうとしなかった

幸な事にキューブの中心部分にいるため、 敵がキューブ上に登つ
て来さえしなければ

隊長は敵にやられる事はないのだ

混乱する隊長から通信が入つて来る

「どうしよう、どうしたらいいかな、多分勝てないよ」

隊長の困りきつた声が敗者達へと通達された

当の俺はと言うと自分の試験が終了した事で脱力しきっていた
隊長は未だ喚いている

そんな隊長のわめきを聞いて、ある事を思い出した

マーキスが始め説明していた特殊兵装の事である

確か隊長機の兵装は一般と違うんだつけ？

待てよ、隊長機ならグレネードがある

それがどんな形かは知らないにせよ

多分持っている事は確かなのだろう

この時点では残り時間はわずか10秒を切っていた
俺はすぐさま通信を入れた

「隊長、グレネード持つてますか？」

「えつ！？ 何それ」

隊長の返答は予想通りのものだった

時間がなくあせっていた俺は隊長へ雑な返事を返す

「右薬指のボタンを押して、トリガーです！！ 隊長の視点から1つ先のキューブの影に

敵がいるんです、そこめがけて投げて！！」

「急いで！！」「はよせんか！！」

隊長に俺達の最後の叫びが通じたかわわからない

やがて俺達の声に答えるように隊長の赤いサイクロプスは動きだした
腰辺りから丸く銀色に輝くボールを出すと、正面へと投げつけていた
そのボールはキューブ1個分飛んで行くと

地面へと吸い込まれるように落ちて行き、眩い光を放ちながら強烈
に発光した

その発光を最後に、試合終了を告げるブザーが鳴り響く

そのブザーと共に俺達の

激動の

適正試験が、今、終了したのだ

チャプター13 「我が心は戦場にあり」

ビーツといづブザー音と共に隊長の視観だった画面が黒いブラックスクリーンへと変わった

俺はコクピットの中で大きな溜め息を付き
椅子に深く持たれ込む

ドサツという音が鳴る、椅子のクツクツ音の間隔が今は心地よかつた
はたして試験は合格だったのだろうか

しばらくしてガチャツという音と共に
眩しい光源がコクピット内一面を照らし出した

そつこえは第3ラウンドの勝負、どつちが勝ったのだひつ
この試験では試合結果を通達するアナウンスが一度も流れないので
2ラウンドまでは際どい勝負がなかつたために試合結果はまるで気
にならなかつた

そんな事を考えていた時、技術者の「お疲れさまです」という言
葉で現実の世界へと戻俺は戻つて行く

俺はその声に思わず、コクピット内でフラフラと立つて、外へ出ようとしたのだのだが

酷いフレッシャーと、張り詰めた緊張感に長時間さらされたためか
上手く立ち上がる事ができなかつた
その行動を見かねてか技術者がまた声を掛けてくる

「大丈夫ですか？手をかしましょう」

「ええ、すみません。お願いします」

俺は一言そういうと技術者に担がれて、やつとコクピット内から外へ出る事ができた

俺を外へと出し、仕事を終えたのだろう
技術者はスタスタ歩いて奥の方へと行つてしまつた

奥には大層な計測機器が山のようく積み込んである
装置の周りに自衛官が1人と技術者が3人なにやら話しているみたいだ

とりあえず辺りを見回して見る
黒い卵形のコクピットが15台、綺麗に並んでいる
最大対戦数15対15でもできるのだろうか？

俺が周りを注意深く観察していた時

他のコクピットの脇から2人の男が出て来て俺に声をかけてきた

その姿を見てある事を思い出す、そうだ！

一緒に鬪っていた奴らだ！！

「よう、大将」

この声は！、エレベーターに乗る時に見た事がある
この関西風の喋り方。聞き覚えがあるぞ

04号機のパイロットだ！！

04号機のパイロットにつられての隣に居る男が俺へと挨拶をする
軽く頭を下げて「お疲れ様です」と一言の挨拶
雰囲気としてかなりの礼儀正しさを感じた

たぶん03号機のパイロットなのだろう、この男の声もやはり試合
前から聞いた事があった

エレベーターに乗った時の話だ

試験に対して激しく動搖している奴が一人いた、その時は声が裏返
つていたものの

良く聞いてみるとやはり同じ声なのだ

とりあえず挨拶を返す事とする

一通り挨拶を終えると

04号機のパイロットが喋りだした

「大将。名前なんていうねん？」

そういうえば、さつきまで一緒に戦っていたのに

俺はその戦友の名前を全くといって知らない

オンラインゲームの世界なら、リアルの名前を知ることは無いし
別に知りたいとも思わない

でも、今さつきやつたアレはゲームと言えるのだろうか
まあそんな事今考える事でもないのだが

暫くして自己紹介が始まった

04号機のパイロット

名前は川辺洋一（カワベ ヨウイチ）と言つらしい

彼の話だと、FPS経験者でちょくちょく遊んだ事があるのだと
やたら状況把握が早かつたのもその為だ

身長は高く、痩せ型の体形だ

顔は細く、鋭い目つきが印象的だ

その第一印象とは丸で間逆の大坂弁と

陽気さが回りの空気を一瞬で変えてしまう

03号機のパイロット

名前は萩原晃助（ハギワラ ヨウスケ）

彼は、FPS初心者だ

身長は俺ら3人の中でも一番低く

多少天然パーソナリティの髪にメガネが印象的だ

さらにこの考察が必要かどうかは分からないが

今回のこの演習はドキドキハラハラ物だたといつ

彼は状況に対する飲み込みが早く

演習最後の終局間際には既に銃器の射撃が3人の中で一番上達していた

トラックボールでの操作は初心者の方に多少歩があるようだ

やがて、話が盛り上がりかけた時である

奥で話し込んでいた自衛官が俺達へと声を掛けてきた

自衛官が発言する

「君達、お疲れ様でした」

自衛官は一拍の間を挟んで続けた

「君達の試験結果は後ほど通達する事とする、施設内の宿泊施設で待機しているように」

ああ、やっぱり家には帰れないのか

そんな事を考えていた時だ

俺の脇に居た川辺が自衛官へと突つかかっていった

「おい！ どういうこっちゃねん。今の試験わいらの方がエライ不利やつたやないか！！」

川辺は感情の気腹が激しいタイプなのだろう

さつきまで、隣で喜作に話していたのに

今は顔を真赤にして自衛官に突つかかっている

「2号機のパイロットの事もそうや、あいつは何処へいったつちゅうねん」

確かにそうだ、終わった直後は疲労からか、全く気にならなかつたし

初めから4人で戦っていたのだから今さら2号機のパイロットが出てきても対応に困る

そして今川辺はこの試験の疑問、理不尽さを自衛官にぶつけているのだ

暫く川辺の言い分を聞いていた自衛官がその重い口を開いた

「この適正試験は機械に対する適正を判断するものであり、試合に勝つことが目的では

ない。君達は私見だが、良く戦つたと私は判断している」

その言葉と共に重い空気が辺り一面に立ち込め

また自衛官が口を開いた

「だが、大変残念な事に、君達の行動を台無しにする輩が居た。

彼は今別室で明日来るであろう移送車を待っている所だ。君達も試験に落ちれば同じ道を歩む事になるだろう」

その言葉で周りが凍りつく、先ほどまで熱かった空気が一瞬で冷めていったのを感じた

そして川辺の顔から血の気が引いていくのが見て取れた

詰まる所をいふと、試験に参加しなかった02号機のパイロットはラウンジ終了時点で適正無しと判断されたのだろう
コクピットから排出された後、拘束されて
明日別の駐屯地へと移送されるのだという。
もし俺達の中で誰かが適正無しとされたら、02号機のパイロット同様
別の駐屯地へと移送されるのだろうか？

そうなつた場合どうなるだ、 、 、 。

本当に戦争なんて事になつてしまつたら

前線送り！！

もし前線に立つ事になつてしまつたら本当に生身で戦わなければいけなくなるのだろうか

既に既逆らう気力を無くしていた

そんな俺達に追い討ちをかけるように一言

「今回君達の発言は報告しないものとする、不祥の事態もあつた特別に大目にみよつ」

自衛官が良い人で良かつた

ほつと、肩を撫で下ろした時だ

演習施設の扉が開いて、2人の自衛官が中へと入ってきた

彼らは俺達を施設内の宿泊所へと案内する役目らしい

この施設内で一体どれだけの数の自衛官が働いているのだろうか少し疑問になつた

2人の自衛官に連れられて、俺達は宿泊所へと案内される案内される途中疑問に思つてている事が1つだけ残つていたので萩原に聞く事にした

「なんで、無線連絡使わなかつたの？」

川辺が割り込んでくる

「そうや、みんな、連絡とりあつてたんに、あんさんだけなんで使わなかつたんや？」

萩原は疑問そうな顔を浮かべている

そして答えが返ってきた

「逆に聞きたいで、どうやって連絡してたんです？」

なんともいえない返事が返ってきた

そしてさらに続ける

「ほら、説明とかもちゃんと流れなかつたし、既さんじゅうやつて気がついたんですか？」

そういうわけで見ると確かにそうだ高島がそこまで詳しい説明をした

かといふと疑問である

それに彼も緊張していたのだ、そんな状況下で必要最小限以外の事に手を出す人間はそういうない

実際、俺もそうだ

事前に渡された資料が無ければ、無線連絡を使わなかつたと思つそれに右手の説明は延々と射撃説明だけだつたし、ヽヽ。

「でもさ、資料とかあつたじやん、あれに結構詳しく書いてなかつたつけ？」

俺はそういふと、萩原の顔を見た

案の定、萩原の目が泳いでいるのが確認できた
書いてあつたけど、見なかつたの？」

そして沈んだ表情のまま、萩原は喋りはじめる

「ああ、資料に全部書いてあつたんですね
「そりや、資料どないしたふや」

川辺がすぐさまつっこみを入れた

「えつと、あの、ホールにあるんです、座つてた席の上に置いてあるんですよ

どうやら急に自分が呼ばれたので慌てて出て来たらしく

資料はバイブルの上に置き忘れたらしいのだ

そして試験が急に始まつてしまつたもので

特に対応も出来ずになんか無音君になつてしまつたという

その光景を見て川辺は大笑いをしていた

やがて俺達は宿泊所へと案内された

宿泊所は各2名1組の2人部屋で

思い描いていたイメージより遙に良かつた

個室は番号順に振り分けられていて

1～2 3～4で分かれている

つまるところ、02号機がないので俺は2人部屋を1人で使う羽目になった

簡単な挨拶をして川辺、萩原と別れて部屋へと入る無駄に広すぎる部屋だ

その部屋に入った時、妙な寂しさに襲われた普段から一人暮らしをしていたというのに

こんな状況で一人になると、ここまで寂しいものなのかと思った

そんな俺の寂しさを紛らわすように

部屋の隅っこにはテレビが一台置かれていたテレビの電源をつけて無作為にチャンネルを回すザーザーという音だけがテレビから流れ続けていた

他のチャンネルへと切り替えてみると、やはり砂嵐だ全てのチャンネルを試して見たのだが砂嵐しが永遠と続いてた

「なんだ、こんちきしじょう！？」

バチンとテレビを叩くと

ふてくされて部屋のベットに横になると
急な眠気が俺を襲う

完全な眠りに入る前に少し考え方をしていたと思う
もし、あのロボットで俺が戦場に行く事になったのなら
俺の心は何処にあるのだろうか

はたして俺は戦場にいる事になるのだろうか？

戦場では不死身と言つて良いくらい頑丈なロボットがライフルを片手に動き回り

発見した敵を次々と銃撃して行く
考えただけでも恐ろしい兵器だ、、。
こんな兵器を造つて何をしでかすつもりなのだろう、、、。

チャプター14・1「採用通知」

心地良い眠気を裂くような、扉を叩くノック音で目が覚めた
俺は一体どれだけの時間眠っていたのだろうか
分からぬ

窓一つないこの室内で時間の感覚は既に奪われていた
まだ一歩もたつてないのだろうけど

ダンダンダン

「俺や、川辺や！…」

扉の向こうに居るのは川辺だ

一体なんの要なのだろうか

まあ、このまま眠る理由も無いし、暇だし、起きるか！

そして、俺は扉のドアを開ける事にした
扉の向こうでは、先ほどまで一緒に戦っていた中間が居た
その横に自衛官が一人立っている、また見ない顔だ

自衛官が喋りだす

「正道真一、高島チーフがお呼びだ。ついて来い」

そう一言告げると、自衛官は俺の正面から向きを変え
スタスタと廊下を歩いて行つた

それを追うように、川辺、萩原が後をつける
一体全体何事だろうか

去り際だった、川辺が俺に向かつて言った
「なにぼさつと立つとんねん、はよ行くで」
川辺より一足先に自衛官を追う萩原から声が掛かる

「みなさん、先いきますよ～」
間の抜けた声だ

事態の飲み込めない俺は採り合えずついて行く事にした

「ああ、ごめん。すぐ行くよ」

そういうて靴を履き、彼らの後を追う
自衛官の後ろを歩きながら俺は聞いた

「なあ、一体何事なんだい？いきなり呼び出された、これから何があるつていうんだ？」

俺の質問に川辺が答える

「さあな、俺かて詳しい事は分からんのや、多分採用通告やとは思うけど」

その発言に繋げるよつにして萩原がいう

「ええ、もしかしたら不採用通告かも知れませんけどね」

その発言を聞いて川辺が萩原の首に腕を回し
軽くチョークスイーパーを決めた

萩原が絶えかねて、首に回つている川辺の腕をパン、パンと3回叩いた
たぶん腕をたたくのはギブアップつて事なのだらう
そして川部が萩原の首から腕を放した頃だらう

やたら長い廊下を進んでいた、俺達は施設内の応接室らしき場所へ
と案内された

自衛官が扉をノックをする

「失礼します、正道、萩原、川辺、以下三名をお連れしました
自衛官の言葉を聞いて扉の向こうから声が聞こえた
「いぐるり、入れ」
自衛官は扉を開け、俺達を中へと案内した
そしてその声に誘われるよつて中へと入る俺達

自衛官は腕を直角にまげ水平に掌を額に付けると
敬礼して一言挨拶を継げ、外へと出て行つたしまつた

俺達の目の前には3人の男女がいる

やがてソファーへ案内され腰を掛けると
2人の男性は俺ら同様反対側にある細長のソファーへと座つていた
その隣にいた女性がいたが座る事はなかつた、立つてゐるのが好き
なのだろうか？

この2人は知つてゐる

ホールの壇上で見た顔、そして演習場で聞いた声だ
だがもう一人の女性はわからない、誰だろう

髪は肩にかかる位の短めで

顔には細めのメガネをかけている

白衣を着ていてもわかるくらいスレンダーな体格で
童顔だが年齢は20代後半といった所だろう

多分俺よりは年上だと思う

仄かに香る甘い香りの香水が花を刺激し少し心地よかつた
隣の男同様白衣を着てているという事は多分科学者なのだろう

そんな事を考へてみるとマークスの挨拶で話が始まつた

「諸君、先ほどの試験はご苦労」

マークスの威圧的な声が俺達に圧し掛かる

「良い、データが取れたよ。まさか我々の部隊があそこまでやられるとはね」

そう言つと得意げな笑みを見せた

マークスの笑みがどう言つ意味だつたかわ分からないが
米軍側はあれでもちゃんとした軍事演習だつたのだろう
でも、こちら側からして見ればいい迷惑だし

どう転んでも家に帰れないというのはかなり鬱な話だ
なら、なるべく命が掛らない方を選ぶしかない

俺は心の中でそう考えると

「マーキスの笑いが止んだのを見計らって、話かける事にした
「えつと、俺達は何故ここに呼び出されたんですか？」

そう言って、マーキスの顔を見つめる

マーキスの目が急に鋭くなるのが見て取れた

やはりこの軍人怖い！！

それに本来なら俺の発言の後に川辺がデシャバって来てもおかしく
ないのに

俺の横の2人はやけに静かだ

少しして、俺を鬼の眼で睨んでいたマーキスの口が開いた

「ふめ、確かにそうだ、日本人は前振りが嫌いと見える。だが、前
振りもせず唐突に本題を話しても良いものだろうか？」

そんな言葉を吐いて、マーキスが隣の高島を見た
いや、目で合図をしたと言つて良いだろ？

その合図を受け取つて高島が喋りだす

「良いんだよマーキス、彼らはよっぽど試験の結果が気になると見
える。私達が呼び出した理由が他の事だとも知らずにね」

高島のその発言に面を食らう3人

えつー？違うのかよ、。。。

まるで心の中を覗かれているみたいだった

「君達に合否を通達する前にまず片付けておく問題があつてね
うん、この空氣、かなり不味い

そして、その重たい空氣に圧倒され俺は軽く下を向いた

「今回の演習プログラムには君達の奇怪な行動が組み込まれてはいなかつたからね」

高島のその発言でようやく呼び出された理由が見えてきた
俺達のゲリラ戦、特殊コマンドを使って戦つた事が裏目に出了のか
もしそれない

「それでだね、君達の採つた行動をプラスにするかマイナスにする
かを先ほどマークスと話したんだ」

頭の中身がグルグルと回っている

そして高島の話している内用の半分も理解できていない自分がその
に居た

横の2人も同じ気持ちなのだろうか

俺はこういう場面に弱い

プレッシャーに弱い体质というか

更に追い討ちをかけるかのように今度はソファーにもたれかかる、
高島の目が鋭くなつた

「それでだね、君達の作戦。特殊プログラムに気がついた事はプラスに採点する事にしたよ
なにつ！アレで良かつたのかよ

内心凄いビビつていた

そして高島のその言葉を聞いて一気にぼやけていた視界が開けた
ああ、あれで良かつたんだ
俺は心の中で何度も咳くと
ほつと胸を撫で下ろした
ホットしているのは他の2人も一緒だろ
肩の力が一気に抜けた
「その結果だがね、この中から既に2人採用は決定しているのだが
ね」

高島の一言で言葉を失つた

つまり1人は不採用つて事になるのか

本題つてそういう事だったの？

若干の和やかムードが一瞬で険悪になる

口籠る高島に替わりマークスが喋り始めた

「諸君は良く戦つた、作戦は真に素晴らしいものだった、だからといつてそこまでの採用枠があるわけではない。残念ながらこの中の1人は適正無しと判断せざる負えなかつた」

断定的なマークスの言葉が矢のように突き刺さつた
できるのなら全員採用して欲しいものなのに

前線に行く奴を尻目に喜ぶ事なんて誰が出来るんだ

いよいよマークスがその不採用を告げるようだ

「萩原晃介といったかね、君の名前は」

そういうつてマークスは鋭い目で萩原を見つめた

凍るように固まる萩原

「ふめ、何も言わなくともいい。君は試験中もそうだつたね、音信不通はチームを危険に晒すだけではない、、、、。」

そう言いかけた時だつた

川辺が何時も通りの威勢で話に割り込んでくる

「そやけど、萩原のやつがおらんかつたら、ワイラ全員やられとつたわ！！」

レイブンの目が萩原から川辺へと移動する

一触即発とはこの事をいうのだろう

一般人と軍人では勝負は目に見えている

仕方なく俺も萩原の弁解に参加する事になつた

とうの本人はとすると今も固まつたままだ

「俺も、川辺さんの意見に同感です。萩原さんは喋りはしなかつたものの、作戦に対しても大きく貢献したのは事実です」

俺は一拍の間の後に続けるようにして言った

「それに萩原さんが通信に参加出来なかつたのも、そちら側の説明不足が問題なのでは？」

こんな事をしても無駄なのかもしれない

でもできればチームを採用して欲しいものだ

「だが、君は試合中に他の仲間へ連絡をとる事ができたではないか

もつともな意見が帰つてきた

その意見に付け加えるようにして高島がいう

「情報を読み取るのも試験の課題の一つでね」

無茶苦茶な話だ

その言葉で始めてこの試験の門の狭さを痛感した

俺達はアップ採点されているから良い

FPSだつて経験者だ

そんな俺達だつて瞬殺される状況なのに

他の連中がどれくらい戦えたかなんて目に見えるじやないか

チャプター14・2「採用通知」

暫くの沈黙が流れた

部屋の空気はとても重く

今も直、マークスは鋭い目つきで俺達を睨みつけていた

そんな重い空気を断ち切るように

今までずっと沈黙を守っていた白衣の女性が喋りだす

「マークス中将、報告し忘れていた事があるのですが」「一瞬煙たそうな顔をしたマークスはその報告を聞く事にしたじく女性の方を向き、鋭い眼光を飛ばすと言った

「なんだ？」

マークスは今更という感じだろう

顔を少し顰めて女性の話を聞いている

「萩原品介が不採用になつた理由に、会話に参加しなかつたという原因を挙げるのなら考え方を改めるべきだと思います」

女性の言葉を聞いて一同が一斉に女性の顔を見つめていた

マークスが顔に疑問の色を浮かべながらその女性へと言い返す

「どういう事だね？」

動搖しているマークスに今だとばかりに女性は置み掛けた

「えつとですね、先ほどわかつた事なのですが、通信ボタンが壊れていたんですね。03号機が音信普通になつたのもその為だと思つんですね、Hラーがあつたというか、」

正直なぜこの女性がそんな事を言つのか疑問に思った

俺達は試験終了後に萩原が音信不通にしていた理由を確認すみだし今この時点で女性が俺達をかばうメリットがまるでわからない

マークスはなんだ、そんな事かという感じに顔を表情を戻すと言つた

「私は技術者からそんな報告は受けていない」
そして、少しばかりか勝ち誇った表情をした

だがそんな表情を崩すかのように今まで静観していた高島が話に割り込んで来る

といつよりは自分の部下の発言にフォーゴーをしようとしている感じだ

「私は報告を受けているよ、君も聞いているものだと思っていたのだがね」

「なんだと、しれは本当か高島…？」

高島の意外な発言に、今度はマークスから驚きの声が上がった
「ああ、それに私の助手が言うのだから間違いないよ。私が彼女に調べるよつに言つた事だし」

仲間から背中を刺され、急にマークスはアタフタし始めた
何がなんだか、分からるのは俺達も同じだ
暫く考え込んだ後、頭の整理がついたのだろう
マークスが喋りだす

「だが、それでは通信したかどうかは分からないではないか。仮に連絡機能を使つていなかつたかもしれないだろ？」
マークスはそう言い終えると、高島へと視線をやつた
自分の発言に対する答えを聞きたいといつた感じだろうか
だが、当の高島はといふとマークスの視線には気付いていたものの視線を返さずに、常に一点
萩原をじっと見つめていた

じつやら萩原の意見を聞きたいらしい

だが、萩原はといふと、ずっと府いていてじつと話の行方を見守っている

その視線に気がついた俺は隣に居る萩原を肘で少し叩いた
やがて顔を上げて前方の視線に驚くと萩原は、その合図を読み取つ

たらしく、やつと重い口を開いた

「あの、僕、右手小指のボタンを押したんですけど反応が全くなくつて」

萩原の一言はマークスへとトドメを刺した

高島の意見も待たずマークスは凍りついていた

今やマークス一人が道化人と化している

助手からまた声があがる

「無線を使えない状況下で仲間への通信方法を見つけ出した彼のボテンシヤルは素晴らしい

しいと私は思うのですが」

その言葉が決めてと言つていいだらう

萩原は無線以外の連絡方法を確かに見つけており

戦闘中に首を縦に振つたりする事で気がつかないうちに指示を受け取つていた事を知ら

せていたのだから、あの女性の言つ事には正しいものがあった

やがてマークスが顔を上げると仕方ないと言つた具合に

採用通知を3枚奥から取り出して、俺達へと手渡した

その通知を受け取ると俺達は重たい空気の流れれる

応接室を後にする事にした

一礼してやがて廊下へとでる

マークスの話では、後ほど集会らしいものがあるので参加するよう

にとの事だったけど

また自衛官が呼びにくるのかな?

長い廊下を半分くらい進んだ時だろうか
川辺が喋りだした

「いや、一時はどうなるものかと思つたわ、結局3人採用になつたのはいいものの。あのネーちゃんはいつたいなんやつたんやろか？」

確かに川辺のいう通りだ、あの状況で上官に楯突く事での女性になんのメリットがあつたのだろう

それは俺達も同じ話だ、萩原の事を変に弁解したせいで不採用になついてもおかしくないのだ

そんな中自分の身を呈して弁解するほどの義理が彼女にあつたのだろうか？

それにしてあの助手の声どつかで聞いた事があるような

そんな疑問が萩原の一言で吹き飛んだ

「あの人、隊長と同じ声してませんでしたか？」

「そうだ、隊長だ！」

思わず叫んでいた

川辺も驚きの顔を隠せない様子だ

「それに、隊長、実際は運営責任者の助手をやつてるつて言つてしまつたよね」

マーキスの影に隠れてはいるが、多分施設内ではレイブンより強い権力を高島は持つてゐるのだろう

それなら辻褄があつ

作戦で俺達の足を引つ張つたせめてもの償いだつたのだろうか

隊長は萩原の為に嘘をついたのだ

「あの隊長も良い所あるんやけ、見直したで～」

やがて自分の部屋についた俺達はまた暫く待機する事になつた

チャプター15「入隊」

気が付けば暫くという時間ではなくなつていた採用通知を貰つてから既に3日の月日が流れている

何で時間の感覚もないのにそんな事が分かるかつて?
それは、時計があるからだよ

まったく拷問だ!!

せめてテレビがまともに映ればいいのに、、、。

この暇な状況で川辺や萩原がタマに遊びに来ててくれたけど話のネタなんて1日目で枯れてしまつたさ

更に2日後

やつと自衛官が俺達を呼びに来た

廊下に出て、自衛官に連れられるが間々にホールへと案内された俺の後ろには30人前後と言つた所だろうか
ぞろぞろと蟻の行進だ
だがその中に川辺、萩原の姿はなく
先に案内されたとみえる

ホールへと足を踏み入れた俺を待つていたかのよつに川辺の大坂弁
が俺へと発せられた

「よう大将、ここや、ここ」

そういわれ俺は川辺の隣の席へと座る事となつた

萩原も先に来ていたらしく、川辺の隣に姿を確認できる

「あつ、最後の組だつたんですね。遅いから心配しちゃいました、
また寝坊したかと思いましたよ」
「そうか、俺が最後だつたのか

そう思いザッとホール内を見回した

ホール内は全然ガラガラで

招集時には一万以上いた学生の姿はそこにはなく
試験通過者だけが、今そこへ座つている

人数は大体500人と言つたと所
少數だが女性の姿も見受けられた

やがて軽快な足音と共に2人の責任者が檀上へと姿を現した
そして演台でマーキスが招集時と変わらぬ演説を始めた

皆はそれを食い入るようにじっと見つめ

マーキスは檀上で軍の規則を新規入隊者へと通達する

この演説が終われば俺達は軍の一員となりこの施設内で当分暮すの
だろう

まあ、今はこれが一番最善の選択なのだろう

やがてマーキスの演説が終了した

今度は拳銃を使う必要がなかつたみたいだ

サイクロプス 一章（我が心は戦場にあり）

完

裏話に続く

裏話1「勝負の行方」

裏話1（勝負の行方）

施設内には良く整備された裏庭が存在する、さらに短い距離だが林道も完備されており

照明は時間毎に明るさが変わるように設定されているため
地下とは思えない空気を味わう事もできるのだ

そんな千度のベンチにアフロとリーゼントがもたれ掛るようになに座っていた

そして、かなり疲れている様子でリーゼントがアフロへと話かける
「流右に歳をとると疲れやすくなるもので」

「そうですか、私はまだ全然いけますよ」

「それにしても、まさか空砲にあそこまでの威力があるとはね」

「一発でしたな」、高島さん、ホール中の学生が一瞬で黙り込む姿
は滑稽で

そつとマークは少し笑つた

「それよりも、マーク、今回の賭けは私の勝ちだな
どうやら高島とマークは賭けをしていたらしい

演習の試合で一度でも鈴木助手が米軍演習生を負かす事があつたら
高島の勝ち

演習生が完封したらマークの勝ちといつた具合な勝負だ
少しの高笑いの後マークが話しだした

「いやいや、甘いよ高島、今回の勝負は私の勝ちだ
「何を言つてゐるんだ?」

疑問の色を浮かべる高島

「彼らはキューブの上に登つていたではないか、あんなの認められ
んよ」

「ほほう、先ほど応接室での出来事を君おられてこられたで

「あの一戦を踏まえても私の勝ちだ」

マーキスが続ける

「ミハエルの機体はグレネードの閃光を浴びたにせよ、Ｋ０まではいたらなかつたではな

いか！！」

今度は高島がにやける

「マーキス、君は大事な事を忘れているみたいだね。今回の勝負はデスマッチだ、鈴木君のチームの残機は2体に対して君のチームは1体しか残つていなかつたではないか

マーキスの表情がハツとする

「〇二号機か！！」

「そうだよ、あの機体は動きはしなかつたものの戦闘には参加していたからね」

高島続けていつた

「攻めない戦法が仇になつたね」

「まさか、この私が賭けに負けるとは、ヽヽ。」

「さて、次のランチは著つてもらつよ、そういう賭けだつたからね

高島がそんな事をいつた時、だらうか

携帯の「ホール音が横の男から聞こえた

「ああ、私だ」

「なんだと、わかつた」

「ああ、すぐそちらにむかう事にする」

携帯の電話を終えるとマーキスが申し訳無さうな顔をして

高島へと言つた

「著るのは少し御預けになつた」

マーキスが続ける

「今ミハエルから連絡があつてね、国防長官が御呼びらしい、私は今から祖国に戻る事にするよ」

そう一言高島に告げると、マーキス中将は足早にアメリカへ帰還する事になった

施設内の中庭にはアフロが一人、ベンチに腰をかけている

「はうあつ、逃げられたか、ゝ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4068d/>

サイクロプス

2010年10月10日10時23分発行